

日本独文学会  
2019年 春季研究発表会

# 研究発表要旨

2019年6月8日(土)・9日(日)

第1日 午前9時30分より

第2日 午前10時より

会場 学習院大学目白キャンパス

## 目次

第1日 6月8日(土) .....	8
シンポジウムⅠ(14:30~17:30) B会場(北2-大会議室) .....	8
インクルーシブ教育と外国語教育.....	8
>>>司会: 草本 晶 .....	8
1. インクルーシブ教育とドイツ語教育の現場 .....	9
>>>齊藤 公輔.....	9
2. 多様な学生との共生を前提とした教育組織の構築 .....	10
>>>山路 朝彦.....	10
3. 英語教育のユニバーサルデザイン実現に向けた課題.....	10
>>>村上 加代子 .....	10
4. 韓国語教育におけるインクルージョンをいかに実現していくか .....	11
>>>中川 正臣.....	11
シンポジウムⅡ(14:30~17:30) C会場(西2-201 教室) .....	12
ロマン派における「遊戯/劇(Spiel)」の理念とその表現.....	12
>>>司会: 岡本 和子.....	12
1. 「神も、自然も遊戯するのではないか?」— ノヴァーリスにおけるシラーの 遊戯概念の受容.....	13
>>>高橋 優.....	13
2. 絵画芸術として並ぶ「断章集」— フリードリヒ・シュレーゲルによる〈遊 戯〉の実践として.....	13
>>>二藤 拓人.....	13
3. ロマン派による喜劇の試みとその射程 — クレメンス・ブレンターノ『ポ ンセ・デ・レオン』をめぐって.....	14
>>>岡本 和子 .....	14
4. 『ブランビラ姫』におけるホフマンの遊戯概念 — 演技・戦い・聖なる祭り の再生 .....	15
>>>土屋 京子 .....	15
5. 「民衆とは遊び場であった」— Spiel 概念の変容とアイヒェンドルフのフォ ルク観 .....	15
>>>須藤 秀平.....	15

口頭発表：文学Ⅰ（14:30～17:45）D会場（西2-301教室）	16
>>>司会：鎌倉 澄／遠藤 浩介	16
1. Thomas Bernhard in der Schule – Ein Machtkampf zwischen Schule und Literatur	16
>>>Atsushi Imai	16
2. ヴァルター・ベンヤミンとゲルショム・ショーレムにおける「嘆き」のモチーフ	17
>>>小林 哲也	17
3. アーダルベルト・シュティフターの自伝的断片における光と闇	17
>>>出縄 祐介	17
4. ムージル『特性のない男』における兄妹愛の行方 — 1920年代前半に書かれた「少佐夫人の物語」の草稿„s <sub>3</sub> +9“を手がかりに	18
>>>白坂 彩乃	18
5. 深淵の詩学 — ツェランとバッハマン	19
>>>國重 裕	19
シンポジウムⅢ（14:30～17:30）E会場（西2-302教室）	20
時事劇と寓意劇のあいだ — Rieser時代から Wälterlin時代のチューリヒ劇場	20
>>>司会：葉柳 和則	20
1. Los von Berlin? — チューリヒ劇場とベルリン演劇	21
>>>市川 明	21
2. 『月は沈みぬ』チューリヒ上演のインパクト — ドイツ語版台本を手がかりに	21
>>>葉柳 和則	21
3. アルカディアとしてのスイス	22
>>>中村 靖子	22
4. 寓意劇としての『聖書に曰く』 — ヴェルターリン時代のデュレンマット	23
>>>増本 浩子	23
5. 意味にあらがう寓意劇 — マックス・フリッシュ『ビーダーマンと放火犯たち』	23
>>>松鶴 功記	23
口頭発表：語学（14:30～16:25）F会場（西2-401教室）	24
>>>司会：平井 敏雄／田中 雅敏	24

1. モーツァルト家の人びとが書簡に書き綴ったドイツ語 — 私的空間における標準語と方言の競合.....	24
>>>佐藤 恵.....	24
2. 現代ドイツ語における接尾辞の生産性と文体差について：コーパスに基づく計量的概観.....	25
>>>今道 晴彦.....	25
3. オットフリートの『福音書』における古高ドイツ語動詞接頭辞 gi- について.....	25
>>>野添 聡.....	25
<b>シンポジウムⅣ（14:30～17:30）G会場（西2-402教室）.....</b>	<b>26</b>
<b>Symposium IV Gefühlsunordnungen: Heinrich von Kleist und die romantische Ökonomie der Affekte.....</b>	<b>26</b>
<b>&gt;&gt;&gt;Moderator: Thomas Pekar.....</b>	<b>26</b>
1. Der amouröse Diskurs in Kleists <i>Penthesilea</i> .....	27
>>>Yixu Lu.....	27
2. „Begierde und Angst“. Die Abjektion gegen Hybridität in Kleists Haiti-Novelle.....	28
>>>Thomas Schwarz.....	28
3. Rechtgefühl und Gewalteskalation in Kleists <i>Michael Kohlhaas</i> .....	28
>>>Arne Klawitter.....	28
4. Das Paradies als paradoxe Strukturformel in Kleists Novelle <i>Das Erdbeben in Chili</i> .....	29
>>>Thomas Pekar.....	29
5. Der unkontrollierbare Gewaltausbruch der elektrisch aufgeladenen Nation. Die Affektmanipulation und der Zufall in Kleists politischen Texten.....	29
>>>Hirosuke Tachibana.....	29
<b>口頭発表：文学Ⅱ / 文化・社会（14:30～17:45）H会場（西2-501教室）....</b>	<b>30</b>
<b>&gt;&gt;&gt;司会：荒井 泰／木村 裕一.....</b>	<b>30</b>
1. 第二次世界大戦中のドイツ軍兵士の読書について.....	30
>>>竹岡 健一.....	30
2. 日本とドイツの学問的伝統の複合性 — カール・フローレンツ『日本文学史』	

における「文化」の発展段階説.....	31
>>>馬場 大介.....	31
3. 可視化される無限性—フリードリヒ・シュレーゲル『ルツィンデ』における 図像性の表れ.....	31
>>>高次 裕.....	31
4. H. v. ホフマンスタール台本/R.シュトラウス作曲のオペラにおけるズボン役 — モデルネから保守へ.....	32
>>>関根 裕子.....	32
5. Gesellschaft und Alltag in Prosa – DDR Literatur als zeitgenössische Quelle für Alltagskultur.....	33
>>>Maria Büttner.....	33
<b>ポスター発表 (13:00~14:30)   会場 (その1) (西 2-303 横多目的スペース)</b> .....	<b>33</b>
1. Nutzung der Zielsprache über Facebook von Deutsch- und Japanischlernenden.....	33
>>>Axel Harting.....	33
2. Untersuchung zu den Ursachen der Angst vor Fehlern japanischer Studierender beim Fremdsprachenstudium.....	34
>>>Marco Schulze.....	34
3. Was sollen die Studierenden am Ende des Grundstudiums können? – Meinungen (Beliefs) von Deutschlehrenden an japanischen Universitäten .....	34
>>>Elvira Bachmaier.....	34
<b>ポスター発表 (13:00~14:30)   会場 (その2) (西 2-403 教室横多目的スペース)</b> .....	<b>35</b>
4. Was macht eine gute Lernergrammatik aus? Japanische und deutsche Lernergrammatiken im kritischen Vergleich.....	35
>>>Nina Kanematsu.....	35
5. Deutsche Sprache und Kultur im außerschulischen Kontext in Japan – eine Fallstudie.....	36
>>>Maria Blödel.....	36
<b>ブース発表 I (14:00~15:30) J会場 (西 2-406 教室) .....</b>	<b>37</b>
Innovation für die Ausbildung der Deutschlehrenden: Das DAAD-Projekt	

Dhoch3.....	37
>>>Julia Weber, Manuela Sato-Prinz .....	37
<b>ブース発表 II (16:00~17:30) J 会場 (西 2-406 教室) .....</b>	<b>37</b>
南チロルにおけるイタリア語系学校の CLIL を用いたドイツ語教育ードイツ語系学校におけるイタリア語教育との比較において .....	37
>>>小川 敦・境 一三・大澤 麻里子 .....	37
<b>第 2 日 6 月 9 日 (日) .....</b>	<b>38</b>
<b>口頭発表：ドイツ語教育 (10:00~11:55) D 会場 (西 2-301 教室) .....</b>	<b>38</b>
>>>司会：Thomas Pekar/高瀬 誠 .....	38
1. Meditation - Einsatzmöglichkeiten und Erfahrungen im Fremdsprachenunterricht .....	38
>>>Luisa Zeilhofer .....	38
2. 留学期間における学習者のドイツ語習得を定動詞の位置から考える：縦断的調査の結果より .....	39
>>>星井 牧子 .....	39
3. Englisch als Hilfe zu DaF. Grenzen des vorhandenen Materials .....	39
>>>Frank Nickel.....	39
<b>シンポジウム V (10:00~13:00) E 会場 (西 2-302 教室) .....</b>	<b>40</b>
<b>フラグメントの諸相 - 文化的実践としての.....</b>	<b>40</b>
>>>司会：前田 佳一.....	40
1. 「歴史」の断片 - ドイツ中世英雄叙事詩のフラグメント性.....	41
>>>山本 潤.....	41
2. 18 世紀末の書籍・雑誌文化とフラグメント美学との関連性 - フリードリヒ・シュレーゲルのアテネーウム期以前のテクストを手掛かりに.....	42
>>>二藤 拓人.....	42
3. 写真的断片の彼方 - クラカウアー「写真」論の理論的・文化史的読解.....	42
>>>深澤 一輝.....	42
4. zer...zer... - トーマス・ベルンハルト『アムラス』のフラグメント性.....	43
>>>金 志成.....	43
5. 損傷した物語 - ゲアハルト・フリッチュ『ファッシング』における断片性の詩学 .....	44
>>>前田 佳一 .....	44

シンポジウム VI (10:00~13:00) F 会場 (西 2-401 教室) .....	44
統語と意味のインターフェイスをめぐって—カートグラフィーの射程 .....	44
>>>司会：森 芳樹 .....	44
1. ドイツ語の事実性補文の統語構造.....	46
>>>伊藤 克将 .....	46
2. ドイツ語の分裂文における人称代名詞と語順の統語構造.....	46
>>>山崎 祐人 .....	46
3. PP と CP の並行性の観点から分析する動詞と方向を表す PP の一体性 .	47
>>>藤井 俊吾 .....	47
4. 半法助動詞としての drohen の意味解釈.....	47
>>>岡野 伸哉 .....	47
シンポジウム VII (10:00~13:00) G 会場 (西 2-402 教室) .....	48
創作システムとしての翻訳 .....	48
>>>司会：新本 史斉.....	48
1. 複数言語による創作と、遍在し増殖する翻訳.....	49
>>>松永 美穂.....	49
2. 私はパラサイトだった — H・ミュラーと O・パステイオールにおける寄生的翻訳と強迫神経症的読解 .....	50
>>>山本 浩司 .....	50
3. 並列、並行、反復 — 言語の複数性と作家の固有性の交差から生まれる創作システム .....	50
>>>新本 史斉 .....	50
4. 多和田葉子の自作翻訳『雪のエチュード (Etüden im Schnee)』に関する一考察 .....	51
>>>齋藤 由美子 .....	51
5. 古井由吉における翻訳と創作.....	52
>>>関口 裕昭 .....	52
シンポジウム VIII (10:00~13:00) H 会場 (西 2-501 教室) .....	52
国民国家と「村物語」— 19 世紀後半のドイツ語圏文学およびイタリア文学をめぐ る地理的想像力.....	52
>>>司会：七字 眞明.....	52
1. 「鉄道沿いの村」への帰郷 — ベルトルト・アウエルバッハの「村物語」と	

「美化」の閉域.....	54
>>>西尾 宇広 .....	54
2. ガリツィアと農民問題 — エーブナー＝エッセンバッハ『村と館の物語』 .....	54
>>>麻生 陽子 .....	54
3. スイス、ポーランド、イタリア — ゴットフリート・ケラー『馬子にも衣装』 における共生形態の模索.....	55
>>>磯崎 康太郎 .....	55
4. 地方の現実を「標準語」で自然に語る — ヴェルガ『マラヴォリア家の人々』 の表現技法 .....	56
>>>霜田 洋祐 .....	56



第1日 6月8日(土)

シンポジウムⅠ(14:30~17:30) B会場(北2-大会議室)

インクルーシブ教育と外国語教育

Inklusive Bildung und Fremdsprachenunterricht

司会：草本 晶

学習者ニーズの多様化が叫ばれて久しいが、その一方で学習者の「個性」の多様化についてはこれまで積極的に顧みられてこなかった。平成28年4月にいわゆる障害者差別解消法が施行され、各教育機関も障害をもつ学習者への「不当な差別的取扱い」の解消及び「合理的配慮」が義務化されたが、実際に合理的配慮等を取り入れた授業を実現するための準備は進展していない。例えば、四肢不自由の学生や識字障害のある学生への指導を任された時、戸惑いを覚える教員は多いだろう。日本学生支援機構によれば平成18年度から平成26年度のあいだに障害がある学生数は4,937人から14,127人へと増加しており、それゆえ授業デザインを見直すことが急務であることは論を待たない。これはドイツ語教育においても例外ではなく、言語の枠組みを超えた議論が必要である。本シンポジウムでは、こうした問題について多様な学習者に対する言語教育のあり方を議論・検討する。

多様な学習者に開かれた教育「インクルーシブ教育」について考える際、「目に見える障害」と「目に見えない障害」という大きく分けて二つの障害があることに注意する必要がある。「目に見えない障害」とは学習障害や注意欠陥多動性障害、心理ないし精神障害等を指しているが、これらは学習者からの申告がない限り教員からアプローチすることは難しい。本シンポジウムでは、こうした事例についても多角的に検討する。

本シンポジウムは、次の3点を中心に議論を進めていく。第一に、教育機関における障害のある学習者に関する輪郭を描く。上述した法的整備に加え、障害のある学習者の割合や、目に見える障害および目に見えない障害の概要など、すでに教育現場が直面している実態について大枠を示す。第二に、理論に裏打ちされたインクルーシブな言語教育の指導実践について考察する。授業実践の中で合理的配慮を行う際、理論的基盤は不可欠である。様々な事例を取り上げながら効果的な指導方法について議論する。第三に、言語教育を中心に多様な実践事例を報告する。教室の内外で起こりうる問題とその解決方策を幅広く紹介し、インクルーシブ教育の本質的な課題について議論を深めていく。特に、目に見える障害の事

例と目に見えない障害の事例の両者を取り上げて問題点の比較検討を行い、あらゆる学習者にとって負担を感じることなく学習しやすい授業の実現について検討する。

言語学習は、「読む」「書く」「聞く」「話す（モノログ・ディアログ）」という5技能を必要とするのみならず、論理的思考力や読解力、異文化間コミュニケーション能力など複数の要素をも包含する、ある意味で非常に難易度の高い複雑な学習である。学習者の多様化に伴ってこうした側面に問題を抱える学習者が増加していることに鑑み、質の高い教育を展開するためにもこうした問題に積極的に取り組むことが求められている。

## 1. インクルーシブ教育とドイツ語教育の現場

齊藤 公輔

平成28年度に障害者差別解消法が施行されたが、情報や対応方法等が浸透しているとは言い難く、教員は授業内外での対応に苦慮している。そこで本報告では、障害のある学習者数の推移や各種取り組みの変遷等を通してインクルーシブ教育を概観するとともに、報告者が経験した事例について報告する。日本全体の実態というマクロの視点と、報告者が経験した個別事例というミクロの視点を交えながら、従来の授業デザインでは対応が困難となる場面が増加傾向にあることを示す。

はじめに、障害がある学習者の実態について報告する。本シンポジウムは、教育現場の障害がある学習者数が増えていることを出発点としている。それゆえその実態を正確に把握することは、本報告以降の議論の前提となる。次に、実際の現場の事例を報告する。特に昨年度担当した車椅子利用の学習者について、報告者が実際に行った授業内の対応や授業中の試みなどを紹介しながら、授業デザインの課題を示す。最後に、報告者の取り組みについて、批判的に検討する。

本報告は、日本におけるインクルーシブ教育の現状と、言語教育の現場における障害のある学生の実情の比較検討を通して、学習者の「個性」の多様化について検討するものである。同時に、障害のある学生の個別事例についても報告し、本報告以降の議論の検討材料を提供する。

## 2. 多様な学生との共生を前提とした教育組織の構築

山路 朝彦

現在、各大学が取り組んでいるのが、職場環境のダイバーシティと多様な学生に対する修学支援体制の構築である。これは、一方では社会的要請であり、社会の中で困難を感じる個人がいるとすれば、その個人の特性に起因する(個人モデル)のではなく、特定の個人の参加を前提としない社会環境のせいであり、そこから生じる参加への制限であると捉える「社会モデル」の考え方が浸透してきたことによるものである。特定の個人が社会的障壁に出会った時には、それを取り除く変更を求めることが出来ることを認め、合理的配慮を行うことが各組織の義務となっている。

また、一方では大学の自己理解に関わる問題である。異なる価値観との共生が新たな価値観を創出することを示し、それを理解した人材を社会に送り出すという使命を担う教育機関が、自らの組織においても多様性への対応(尊重し共生すること)を自らに課すことが当然と考えられるからである。

本発表では、修学支援に関して、合理的配慮が義務化されている国立大学に対して、努力義務にとどまっている私立大学の一例として、発表者が所属する機関を例に整備状況の検証を行なう。すでに他大学等で実現されている先進的事例との差異を明らかにしつつ、中規模私立大学が抱える具体的な問題点を、授業だけではなく、課外の活動・学生生活への配慮、キャリア形成・就職支援をも含めて、報告したい。

## 3. 英語教育のユニバーサルデザイン実現に向けた課題

村上 加代子

言語教育において基礎リテラシー(読み書き)の獲得はどのような活動を行うにしても非常に重要である。しかし中高生を対象とした調査では、英語が「嫌い」な生徒が増加していることに加え、単語や文字など基礎段階での躓きが目立つ。なかでも学習障害(LD)は、「聞く・話す・読む・書く」に弱さを抱える障害で、既に母語の読み書きに困難を抱える生徒であれば外国語学習でも躓きが生じる可能性が高い。しかし通常学級ではそうした生徒への根本的な対策はなされず、特別支援教育でも英語(外国語)指導は敬遠される傾向で、生徒の学びの機会と質が十分に保障されているとは言い難い現状にある。言語習得においては学習者個人の認知的個性や学習意欲といった個人要因だけではなく、対象言語の特性も理

解し、学習者の負担を回避するような授業・教材・カリキュラムづくりが必須であろう。つまづかない工夫をどうすれば良いのか、その答えは子どもひとり一人の中にあり、支援も指導も子どもの理解から始まると考えている。英語教育においては、難しいと思える内容であっても、より楽しく、わかりやすく工夫し、集団の中での個別ニーズに応えられるよう変化・発展していかなければならないのではないだろうか。本発表では英語圏のディスレクシア研究を参考とした基礎リテラシー指導の盲点について指摘し、発達的な観点からの読み書き指導について提案し、実践事例なども紹介したい。

#### 4. 韓国語教育におけるインクルージョンをいかに実現していくか

中川 正臣

「平均的な学習者」のイメージに基づいてデザインされてきた従来の言語教育は、学習者それぞれの認知特性や学習スタイル、母語の違い、障害の有無などといった学習者が持つ多様性を十分に尊重し、教育実践をしてきたとはいえない。日本における韓国語教育に目を向けても、「インクルージョン」、あるいは「ユニバーサルデザイン化」という概念が定着しているとは言えず、筆者の知る限り、本格的な研究も始まっていない。このような問題意識から、筆者は一人ひとりに寄り添う韓国語教育実践とはいかなる営みなのかを模索してきた。

本発表では、「韓国語教育におけるインクルージョンをいかに実現していくか」という大きな問いのもと、ある脳性麻痺を持つ韓国語学習者（本人は発達障害も持っている）と認識している韓国語学習者）に対しインタビュー調査を行い、大学入学前に抱いた自身の目標を達成するために、いかなる学習環境の中、学習活動を行っているか、またその学習プロセスでいかなる問題に直面しているかを浮き彫りにする。インタビュー調査を進めていく中で、対象者は肢体不自由のみならず、「視覚情報の見えにくさ」や「情報処理の難しさ」という認知面の困難も併せ持つことが明らかになった。このような見落とされがちな学習者の認知特性も含め、一人ひとりの学習者に向き合う、よりよい韓国語教育実践を行うための課題を示す。

## シンポジウムⅡ (14:30~17:30) C会場 (西 2-201 教室)

ロマン派における「遊戯／劇 (Spiel)」の理念とその表現

### Die Idee des Spiels und deren Darstellung in der deutschen Romantik

司会：岡本 和子

本シンポジウムでは、「遊戯」とは、観客等を含めた広い意味での「共演者(Mitspieler/Gegenspieler)」との交流である、との考えに立ち、ロマン派の作家たちがこの交流空間をどのように構想し、作品にどのように表現したのかを探ることを目的とする。

ドイツ近代文学における「遊戯」理念の展開は、シラーの『人間の美的教育についての書簡』(1795)をひとつの出発点にしていると言える。シラーは、人間には時間的な変化に基盤を置く「感性的衝動」と永遠化を求める「形式衝動」という相対立する衝動があり、完全な人間においてはこの二つが「遊戯衝動」によって融合されると述べ、芸術こそがこの「遊戯」を担い、全的な人間の形成に寄与するのだとした。つまり、歴史の舞台ではいまだ実現されていない「全的な人間」を、遊戯空間としての芸術作品がユートピアとして示しうると考えたのである。

本シンポジウムが考察対象とする18世紀末から1830年代までのロマン派の作品は、こうしたシラーの遊戯の理念に対する、文学的実践の立場からの直接的あるいは間接的な応答として読むことができる。しかし、ここで考察対象とする四十年あまりは、ドイツが政治的・思想的に大きな揺らぎを経験した時期でもあり、ロマン派と呼ばれる作家たちのなかでも、「遊戯」の捉え方は変化していった。

フランス革命やナポレオン軍によって、自由な市民という理想とともに、暴力の発露や既存の体制の崩壊を突きつけられるなか、シラーの遊戯の理念を文学において実現しようという試みが現われた。ノヴァーリスは「動的」で「偶然性」をとともなう新しい存在のあり方を模索し(第一発表者：高橋)、フリードリヒ・シュレーゲルは、文字メディアに収れんしつつあった文学作品を、他ジャンルの芸術との交流の場と見なそうと試みた(第二発表者：二藤)。

しかし、19世紀初頭のドイツでは「喜劇」がほとんど成功しなかったことが示すように(第三発表者：岡本)、遊戯の理念を個別の文学作品に結実させることは容易ではなかった。また実際の社会においても、自由な市民どうしが交流する空間が夢見られたのはほんの束の間で、1814年にははやくも復古体制が確立される。そうしたなかで、シラーが掲げた「全的人間」や「ユートピアとしての芸術作品」といった考えに距離をとる作家が出てきた。とはいえ、遊戯の理念は捨て去られ

たわけではなく、むしろ文学的営為の方法として拡張されることとなった。E. T. A. ホフマンは、シラーが前提とするような「近代的主体」の問い直し作業には遊戯的な態度が必要だと考え（第四発表者：土屋）、他方アイヒェンドルフは、創作者と受容者の交流にこそ遊戯空間を見出そうとしたのである（第五発表者：須藤）。

## 1. 「神も、自然も遊戯するのではないか？」— ノヴァーリスにおけるシラーの遊戯概念の受容

高橋 優

本発表は、シラーの美学の中核を成す „Spiel“ の概念がノヴァーリス（フリードリヒ・フォン・ハルデンベルク）においてどのように受容され、展開されていくかを明らかにすることを目的としている。ノヴァーリスは『フィヒテ研究』（1795/96）において „Sein“ を „erstes Spiel“ と表現し、フィヒテのように自我を絶対視することを避け、あくまでも動的、偶然的な „Sein“ のあり方を探り、絶対性の追求を放棄することで真に自由な自我の活動が可能になる、という確信に至る。彼はさらに „Spiel“ の概念を拡張させ、「神も、自然も遊戯するのではないか？」「神聖な遊戯」といった言葉を用い、世界そのものを神の遊戯の場として想定する。また「神に至る実験」や「遊戯とは偶然を用いた実験である」という言葉からわかるように、自らの創作行為を神の遊戯の模倣とみなしている。『ザイスの弟子たち』（1798）における鉱物を並べるゲーム、『クリングゾール・メルヘン』（執筆 1800）における劇中劇はその典型的な例であると言える。シラーの „Spiel“ 概念への取り組みが、「新しい神話」「新しい聖書」として展開されるノヴァーリスの創作活動の重要な契機になっていること、さらに初期から後期へと至るロマン主義文芸活動における遊戯性、偶然性の重視がノヴァーリスにおいていち早く理論的に構築されていることを本発表で示す。

## 2. 絵画芸術として並ぶ「断章集」— フリードリヒ・シュレーゲルによる〈遊戯〉の実践として

二藤 拓人

文字メディアが中心化する 1800 年頃の文化において、芸術による〈遊戯／劇〉の場は文学空間（つまり書物の黙読）へと移行・集中していたとされる（Kittler 1978, 1980）。これに従って発表者は、対話篇、小説、詩、箴言、旅行記、評論など多彩な文体・表現からなる初期ロマン派の『アテネウム』（1798-1800）が、別の芸

術ジャンルにおいて別様に生じうる美的体験を、文学という遊戯の場で再現しようとした作品であると考え。この仮説は、当雑誌が「切り離されたあらゆる創作 (Poesie) のジャンルを再び一体にする」というロマン派の基本理念の実践といえる点、更にここでフリードリヒ・シュレーゲルが Poesie を詩・文学としてだけでなく、演劇、音楽、彫刻、絵画といった芸術ジャンルを越境し融合するモチーフとしても構想している点からも説明可能である。

以上に基づき本発表では、当時の文芸に様々な遊戯性が混在していた可能性について、特に絵画と詩・文学との関連に限定して検証し、ジャンル間交流としての遊戯がもつ意義をシュレーゲルの文学的实践から考察する。その際、上記の雑誌における代表作「断章集」(1798) に焦点を当てる。本発表は、このアフォリズム集の提示する受容形態が絵画芸術を鑑賞する環境と視覚的な効果の面で類似関係を見出せることを、一方で初期シュレーゲルのジャンル文芸論に依拠しながら、他方で「断章集」から実際に幾つかの断章を読み通す実演(読解)を通じて論証したい。

### 3. ロマン派による喜劇の試みとその射程 — クレメンス・ブレンターノ『ポンセ・デ・レオン』をめぐって

岡本 和子

「遊戯」という理念が文学においてもつ意味的な広がりの中、演劇 (Spiel) という形式は大きな位置を占めると言えるが、ロマン派の演劇作品(とくに喜劇)で成功したものはきわめて少ない。本発表では、その根拠はドイツ市民社会の未成熟さに求めることができるのではないか、という仮説をたて、クレメンス・ブレンターノの初期作品『ポンセ・デ・レオン』(1803) を考察対象としてその検証を試み、同時に、個別作品としては失敗に終わった喜劇が、形式として有していたであろうポテンシャルを呈示したい。

『ポンセ・デ・レオン』は、言葉遊びや仮装やロールプレイ等、さまざまな次元の遊戯に満ちた作品である。なかでも、愛の成就を目的とするパフォーマンス的な遊戯と偶然性を前面に出した遊戯が、愛の成就の可否をめぐってせめぎあっており、前者は市民、後者は貴族によって担われている。筋書き上は、パフォーマンス的な遊戯が偶然性を凌駕し、登場人物たちの結婚が成立するのだが、作品中唯一の市民と貴族のカップルについては、曖昧な記述が多い。「遊戯とは一定の規則のもとで行われる対等な他者との交流である」と考えた場合、ドイツの歴史の

舞台においては、そうした対話は阻害されていた。その写しが本作品には読み取れるのではないか。ブレンターノにとって喜劇とは、愛の成就という自由な人間どうしの交流への願望とその欠如を描くための形式だったのである。

#### 4. 『ブランビラ姫』におけるホフマンの遊戯概念 — 演技・戦い・聖なる祭りの再生

土屋 京子

シラーの遊戯概念は彼の人間学と美学、それに係わる理想的芸術家像のなかで理解されるべきものであり、いわゆるカント哲学の近代的主体を大前提としている。ケーニヒスベルク時代よりカントから距離を取っていた E.T.A.ホフマンは、むしろ近代的主体の揺らぎに強い関心を抱き、芸術家の「想像力の戯れ」を創作原理とし、「遊戯空間」自体を混沌とした実験的な活動空間としてテーマ化した。1820年に書かれた『ブランビラ姫』では、物語内で繰り広げられる「大胆で気まぐれな Spiel に身を委ねよう」とする読者に向けて、編集人として登場するホフマンは「より高次の自己認識へと至るためには、自己省察に基づく「理念」によって Spiel を統べる必要がある」旨を説く。そして難解な筋で知られる枠内物語では、一对の男女が、カーニバルという非日常的空間の「劇場と呼ばれる小さな世界のなか」で „Spieler“ としてのもう一人の「自我」を見いだし、無我の境地にいたると同時に自己同一性を喪失するが、互いの „mein Spiel“ を見ることで真の自己認識を得るという筋立てになっている。このようにしてホフマンは、シラーが「人間性の条件」とし主観内部の創造的活動の領域とした „Spielraum“ をアイロニカルに扱いつつ、遊戯によってもたらされる新たな自己認識の可能性を彼独自の人間学として提示していることを、発表のなかでつぶさにみていく。

#### 5. 「民衆とは遊び場であった」 — Spiel 概念の変容とアイヒェンドルフのフォルク観

須藤 秀平

本発表の目的は、19世紀前半の社会状況の変化を受けてアイヒェンドルフが新たに提示した Spiel 概念を明らかにすることにある。ロマン主義以前のカントやシラーにおいて、Spiel は自律や自由の概念と結びつき、近代市民社会が要求する目的合理性や実用性に対するアンチテーゼとして機能した。しかし、そうした現実社会と Spiel の二項対立は、アイヒェンドルフにおいてはかならずしも成立しな



い。彼は芸術と社会のあいだに葛藤を感じつつも、その両者の結びつきを絶えず意識し、そうした立場から Spiel に新たな意義づけを試みている。彼は Spiel を、観客を前にしたポエジーの再現として、さらには広く創作者と受容者を接続する行為として意義づけることで、異なる世界を仲介する機能をそこに見出そうとするのである。

こうした Spiel 概念の歴史的変容とアイヒェンドルフの時代認識について、本発表では「民衆」すなわち「フォルク (Volk)」をキーワードに取り組む。アイヒェンドルフは後期の文学論のなかで、「民衆」自体を「遊び場」とみなす、一風変わった民衆観を提示した。それにより彼はフォルクを複数の社会層の交流空間として意義づけつつ、それを俗物に対するアンチテーゼとして理想化している。本発表では、こうしたフォルクや Spiel の捉え方が、ロマン主義「終焉」時代のアイヒェンドルフ作品にどのように反映されているかを、小説『のらくら者の生涯より』(1826) を中心に考察する。

## 口頭発表：文学 I (14:30~17:45) D 会場 (西 2-301 教室)

司会：鎌倉 澄／遠藤 浩介

### 1. Thomas Bernhard in der Schule - Ein Machtkampf zwischen Schule und Literatur

Atsushi Imai

In seiner autobiografischen Erzählung *Die Ursache* (1975) provozierte Thomas Bernhard mit der Behauptung, „die sogenannten Mittelschulen“ seien „längst als Verrottungszentren der menschlichen Natur erkannt“. „Die Welt wäre besser daran“, wenn sie sie „abschaffe“. Sein Verdikt scheint inzwischen vergessen zu sein. Meint man vielleicht, dass er hier wieder einmal übertrieben habe? Was auf den ersten Blick herausforderte, war aber eigentlich nicht neu. Sein Angriff auf die Schule als „Menschen *verziehende*“ Institution erinnert an die schulkritischen Texte der Literatur der Jahrhundertwende: Thomas Manns *Buddenbrooks*, Hesses *Unterm Rad*, E. Strauß' *Freund Hein*, Musils *Törless* und vor allem Heinrich Manns *Professor Unrat*.

Bernhard selbst lernte in zwei Arten von „Schulen“: in öffentlichen Schulen: Volksschule, Hauptschule und Gymnasium, und in der „Schule“ seines Großvaters Johannes Freumbichler, eines verkannten Salzburger Heimatdichters, der den Enkel maßgeblich mit einer Weltanschauung beeinflusste, die in mancher Hinsicht Wertvorstellungen der dominierenden Gesellschaftsschichten widerspricht. Bernhard resümierte, er sei in der Schule seines Großvaters „gegen alle konventionellen Schulen erzogen worden“. Die Erziehung beim Großvater war eine rebellische, philosophisch-

künstlerische, sozusagen „literarische“. So könnte man Bernhards Konflikt mit der „konventionellen“ Schule als stellvertretend betrachten für den Machtkampf zweier gesellschaftlicher Kräfte, der beherrschenden und der opponierenden.

## 2. ヴァルター・ベンヤミンとゲルショム・ショーレムにおける「嘆き」のモチーフ

小林 哲也

ベンヤミンの重要著作には、彼の友人でユダヤ神秘主義研究者のショーレムからインスパイアされたアイデアが見られる。それもあってベンヤミンの「ユダヤ的」モチーフが論じられる際には、両者の思考の親和性、同形性が前提とされることが多かった。本発表では、むしろ二人の差異に着目し、「嘆き Klage」のモチーフの検討を通じてそれぞれの思考の特色を明らかにする。

ショーレムは1917年に「嘆きと哀歌について über Klage und Klagelied」を書いた直後、これをベンヤミンの「言語論の継続」であると『日記』に記している。これを受けた先行研究では、ショーレムとベンヤミンの思考の連続性が注目され、ショーレムがベンヤミン同様、「嘆き」を伝達不可能性、あるいは表現の困難と結びつけることの意味について論じられている。

だが例えばショーレムが、ベンヤミンの言語論での「沈黙」する「自然」の「嘆き」については考察せずに、もっぱらユダヤ回帰を果たそうとする自らの憧憬とこのモチーフを関連づけることから明らかなように、両者の議論の重心は必ずしも一致していない。ベンヤミンは、ユダヤ的伝統の中での「嘆き」の意義についてのショーレムの考察に感嘆しつつも、ショーレムの「嘆き」に見られる預言者的性格づけへの批判的姿勢もうかがわれる。これら両者の差異の検討を通じて、ベンヤミンの「ユダヤ性」への姿勢や、歴史の中で排除されていく存在の「嘆き」を彼が考察したことの意義も明らかになってくる。

## 3. アーダルベルト・シュティフターの自伝的断片における光と闇

出縄 祐介

シュティフターの自伝的断片『Mein Leben』は、1866年のHeckenast宛の手紙からもわかるように、家族への遺言書として構想されたものである。またシュティフターが自伝執筆を構想していたことは、『Mein Leben』の序文部分（第2版）や手紙からも明らかであろう。シュティフターは、最後の故郷の訪問時（1868年）

に、本発表で扱う自伝的断片『Mein Leben』を執筆した。この自伝的断片に関する先行研究は、作品研究と比較して数が少ない。Begemann (1995) は、この断片を18及び19世紀における自伝文学の伝統を打ち破った意味ある作品であると評価し、『die Trennung des Ichs von den Dingen der Außenwelt』を描写していると述べている。このような二元構造は、この自伝的断片において重要である。Begemannは、第一の記憶をトラウマ的な経験として扱い、自我の認識を彼の分析の中心に据えている。自伝文学の伝統的な形態とシュティフターの自伝的断片が異なることは、Schiffermüller (2007) などほかの研究者も主張している。しかしながらこれらの先行研究において、演劇における場面転換とも考えられる「光と闇」の視覚的描写に関する分析は行われていない。闇から光へと移行することで記憶が蘇り、その記憶の内容について述べていく文体は、注目すべきである。この二元構造の分析を行うことによって、シュティフターが構想した自伝の形態を考察することは可能であろう。この視覚的描写は、シュティフターの自伝的断片において、たんに記憶と記憶を分割するという効果を有するのではなく、シュティフターの人生における最も重要な記憶を描写するために使用されていると考えられる。本発表では、シュティフターがその人生に渡り改作した『曾祖父の遺稿』など自伝をモチーフにした作品を考慮し、シュティフターによる自伝執筆の目的についても検討する。

#### 4. ムージル『特性のない男』における兄妹愛の行方 — 1920年代前半に書かれた「少佐夫人の物語」の草稿<sub>s<sub>3</sub>+9</sub>“を手がかりに

白坂 彩乃

本発表の目的は、R・ムージル『特性のない男』(1930/1932)における主人公の過去の神秘的な恋愛体験である「少佐夫人の物語」と、主人公と妹の兄妹愛との関係を考察することで、ムージルにおける愛と神秘主義の問題の一端を明らかにすることにある。考察するさいの参照項として、『特性のない男』の前身「双子の妹」(1923-1926)内の二つの草稿——「少佐夫人の物語」の前身となった草稿<sub>s<sub>3</sub>+9</sub>および兄妹の「楽園への旅」草稿<sub>s<sub>4</sub>+1-16</sub>——を取りあげ、『特性のない男』における「少佐夫人の物語」と兄妹愛の関係と比較対照する。

近親相姦によって兄妹愛が破綻するという「楽園への旅」を扱った先行研究は数多くある一方で、草稿<sub>s<sub>3</sub>+9</sub>はA・フリゼー編『特性のない男』(1978)にもW・ファンタ編『特性のない男』(2016-2018)にも収録されていない。しかしこの<sub>s<sub>3</sub>+9</sub>

は、「少佐夫人の物語」のヴァリエーションのうち、「楽園への旅」を予示するような形で少佐夫人との愛の破綻を描いた唯一の草稿である。この草稿を視野に入れることで、「双子の妹」期においてムージルが、少佐夫人との愛と兄妹愛という二つの神秘的な愛を重ねあわせて描いていたことが明らかになる。それに対して『特性のない男』では、少佐夫人との愛の結末は明示されておらず、「双子の妹」におけるように兄妹愛の結末を予告するエピソードとして機能していない。本発表では、『特性のない男』における「少佐夫人の物語」の描かれ方を「双子の妹」期と比較考察することで、ムージルが『特性のない男』執筆中もなお「双子の妹」期における愛の破綻を念頭に置きつつ、それとは異なる愛と神秘主義の関係を模索していたことを示したい。

## 5. 深淵の詩学 — ツェランとバッハマン

國重 裕

ツェランとハイデガーの関係は、1960年代のトートナウベルクでの出会いやヘルダーリンの詩を介して論じられることが多く、50年代の著作の比較は手薄である。ツェランによるハイデガーの受容の仕方や距離の取り方の変化については、すでにJames D. Lyonらによる先行研究がある。けれども「子午線」として結実するツェランの詩論の推敲のプロセスが、ランボー「酔っ払った船」独訳(1957)と時期的に重なっている点を強調する研究はすくない。

本発表では、「子午線」(1960)が、ハイデガー『哲学とは何か』(1956)に対する批判的応答であること、さらにツェランがハイデガー受容/批判を展開するにあたって、ランボー「酔っ払った船」を独訳が一つの契機となっていたこと(ツェランがこの二冊を同時に読んでいたことはJean Firgesが証言している)を示しながら、ハイデガーとツェランの影響関係にこれまででない角度から照明を当てる。

比較にあたっては、「深淵 Abgrund」、「無 Nichts」という二つの言葉の用法の違いを手がかりとする。「在る」ことを「無」から根拠づける可能性を問うハイデガー。詩作を、深淵を前に試みる対話の営みと重ねあわせるツェラン。「無」によって、はじめて存在者が立ち現れる出会いの場が形成されるというのが両者の共通認識である。しかし、あくまで「ことば」を「在ること」との関連で重視するハイデガーに対し、ことばによって出現した現実のなかに主体の回復までツェランは目ざす。ことばを語る主体の位置づけの違いが生じた背景を探る。

両者の比較を踏まえ、「深淵」「無」をテーマにしたバッハマンの詩を解釈し、

彼女が打ち立てた詩学の独自性をあきらかにしたい。

### シンポジウムⅢ (14:30~17:30) E 会場 (西 2-302 教室)

時事劇と寓意劇のあいだ — Rieser 時代から Wälterlin 時代のチューリヒ劇場

#### Zwischen Zeitstück und Parabel — Das Schauspielhaus Zürich in der Rieser- und Wälterlin-Ära

司会：葉柳 和則

「ナチス時代のドイツ語圏における唯一の自由の砦」, 「第二次大戦期のブレヒト作品初演」, 「フリッシュとデュレンマットの輝かしい成功」。チューリヒ劇場の歴史は、数多の伝説とともに語られ、スイスの国民的記憶の一部を形作ってきた。しかし、こうした伝説の歴史化は、この劇場に関する言説の定型化を生み出し、背景や内実が十分に問われることなく文学史の中に登録されることにもつながっている。

チューリヒ劇場の歴史に関する研究もまた、多かれ少なかれ劇場の伝説化に影響を与えてきた。Curt Riess の *Das Schauspielhaus Zürich* (1963) に典型的に見られるように、ナチス時代に亡命を経験した知識人が劇場の通史を執筆することで、その叙述は彼らの個人史と不可分なものとなっていく。しかしこの傾向は、Ute Kröger と Peter Exinger 編著の *In welchen Zeiten leben wir* (1998) の出版を境にして背景に退いていく。1990 年代末に、第二次世界大戦期のスイスの「克服されざる過去」についての大規模な調査が国家プロジェクトとして実施されて以降、スイス史における脱神話化の傾向が顕著になった。文学史叙述においても、たとえば Ursula Amrein の *Los von Berlin!* (2004) は、綿密なアーカイブ調査に基づいて、チューリヒ劇場の歴史の書き換えを試みている。

しかし、1990 年代以降のチューリヒ劇場研究は、歴史環境との関係に力点を置いているがゆえに、上演された戯曲を詳細に分析するという姿勢が乏しくなるきらいがある。本研究グループが 2015 年に開催したシンポジウム「チューリヒ劇場と文化の政治」(日本独文学会秋季研究発表会, 鹿児島大学) もまた、スイスの愛国的文化運動, 「精神的国土防衛」との関係においてチューリヒ劇場の歴史を描き出す試みにとどまっており、そこで見出された知見を個々の戯曲に立ち戻って検証するには至っていない。

以上の経緯を踏まえ、今回のシンポジウムでは、2015 年に呈示した時事劇と寓

意劇という二つの戯曲形式の関係性が、劇場の外部の歴史・社会的要因が作り出す布置の中で変容する過程を個々の戯曲に焦点を当てて解明する。具体的には、①チューリヒ劇場の歴史のうち、劇場の基本スタイルが生まれ、定着していく時代、すなわちドイツからの亡命知識人を劇場に受け入れたフェルディナント・リーザーがオーナーにして総監督であった時代（リーザー時代、1933-1938）、②アメリカに亡命したリーザーの後を継いでオスカー・ヴェルターリンが総監督を務めた時代（ヴェルターリン時代、前期 1938-1945、後期 1945-1961）を取り上げ、それぞれの時代の代表的戯曲の内部構造とその歴史・社会的意義を確認する。

## 1. Los von Berlin? — チューリヒ劇場とベルリン演劇

市川 明

フェルディナント・リーザーが総監督だった 1933 年から 38 年におけるチューリヒ劇場について論じる。1920 年代のベルリンで、ピスカートアやイエスナーのもとで仕事をしてきたリントベルクやシュテッケル等の演劇人は、ヒトラーの政権獲得後、亡命を余儀なくされる。リーザーは彼らをスカウトし、「亡命者・ユダヤ人・マルクス主義者」劇場が形成された。チューリヒでは、精神的国土防衛との関連でベルリンに対する敵対像のようなものがあった。ベルリン演劇が持っていたモダニズムがどのように移植され、独自の光を放ったのか、先行研究(Mittenzwei: *Das Zürcher Schauspielhaus 1933-1945*, Amrein: *Los von Berlin!*) を補う形で、「ベルリンからの解放」について論じる。

チューリヒ劇場は 1933, 34 年に、ユダヤ人問題をテーマにした二つの時事劇、ブルックナーの『人種』と F. ヴォルフの『マンハイム教授』（原題『マムロック教授』）を上演している。作品や上演を分析し、上演をめぐるファシスト（国民戦線）との騒動に言及する。更にデンマーク亡命中のブレヒトがチューリヒ劇場に売り込んだとされる寓意劇『まる頭ととんがり頭』（1933/38）や、当劇場初演のフリッシュの『アンドラ』（1957/61）を考察し、時事劇と寓意劇のあいだを探る。

## 2. 『月は沈みぬ』 チューリヒ上演のインパクト — ドイツ語版台本を手がかりに

葉柳 和則

ジョン・シュタインベックの戯曲『月は沈みぬ』（1942, ドイツ語版：1943）は、軍事的な大国による北方の小国の占領とそれに対するレジスタンスをテーマにした寓意劇である。この作品は第二次世界大戦期のチューリヒ劇場において最多の上演回数を記録した。ナチス・ドイツによる占領の可能性を意識し続けてきたスイ

スにおいて、この上演が持っていた文化史的意味を解明することは、チューリヒ劇場研究の課題たりうるはずである。しかし、Werner Mittenzwei の *Das Zürcher Schauspielhaus 1933-1945* (1979) を唯一の例外として、この戯曲はほとんど研究されていない。アダプテーション研究の手法が確立されるまで、翻訳や翻案の研究は二次的な位置にとどまってきたことが、この集合的忘却の背景にある。この戯曲のドイツ語訳が出版されなかったことも忘却の理由の一つである。

本報告は、アーカイブ調査によって確認した 1943 年当時の上演用シナリオに基づいて、この戯曲の歴史的・文化的位置を探り、結論として、①『月は沈みぬ』は、寓意劇/時事劇という視点から見たとき、ヴェルターリン時代のチューリヒ劇場のドラマトゥルギーと親和性を持つこと、②この作品を構成する諸要素は、戦後のチューリヒ劇場で上演されたフリッシュやデュレンマットの作品の特質を先取りしていたことを提示したい。

### 3. アルカディアとしてのスイス

中村 靖子

長らくシラーは、「自由」の思想家であると同時に「一つの国民」という思想を代表する象徴的存在だった。ナチスに至るまで、また戦後もさまざまな陣営がシラーを自分たちのイデオログとして利用した(Frevert: 2007)。そのシラーの作品の中でも最も頻繁に上演されたのが『ヴィルヘルム・テル』である。それはドイツ国内においても、またナチス政権に脅威を感じるスイスにおいても、「一つの国民」を謳う愛国的な装置として利用されたのである。こうした動きに区切りを付けたのは、デュレンマットのシラー演説である。曰く、「政治によって自由は実現されない、少なくとも部分的にしか実現されない」と。

ドイツ語圏スイスは初期啓蒙主義以来、ドイツにとって「もう一つのドイツ」であり続けたが (Amrein: 2013)、戦後になるとスイスは、ナチス時代には「自由の砦」だったという自国像を創り出す。それはスイスという国の「中立性」を示してもいて、「精神的国土防衛」運動における架空の「国土」とも照応し合う。フリッシュの『学校版ヴィルヘルム・テル』は、このような「自由発祥の地」であり、その住人であるというスイス(人)像を解体する試みである。こうした「アルカディアとしてのスイス」を、スイス内部の発言から検証する(Frisch: 1946. Muschg: 2007)。

#### 4. 寓意劇としての『聖書に曰く』 — ヴェルターリン時代のデュレンマット

増本 浩子

本報告では、デュレンマットの劇作家としてのデビュー作『聖書に曰く』(1947)を初演当時の文脈に置いた場合、この戯曲が第三帝国とスイスという二重の寓意性をもつものとして解釈できることを明らかにする。

まだ無名だったデュレンマットがチューリヒ劇場でデビューするという幸運に恵まれたのは、当時のスイス文学界・演劇界の「スイス化」の動きなしにはあり得なかった。第二次世界大戦中にはチューリヒにベルリンの演劇が持ち込まれ、チューリヒ劇場が反ファシズム亡命作家の砦となったのに対し、戦後はスイスの若い才能を発掘し、世に送り出そうという動きが顕著になったのである。

『聖書に曰く』は16世紀にドイツ北西部の都市ミュンスターに出現した再洗礼派王国を題材にしており、集団の狂気を問題にしている点でヒトラーの第三帝国の興亡を描いた寓意劇と解釈することができるが、初演における演出のために、精神的国土防衛によって守られるべき「スイス的なもの」を格下げする作品ともなった。つまり、再洗礼派王国の王（ヒトラーと二重写しになっている）の食べ物にされたミュンスター市長を、当時、ヴィルヘルム・テルを演じるならこの人と言われたスイスの国民的俳優ハインリヒ・グレートラーが演じたために、チューリヒの観客は「スイス的なもの」が貶められたと感じたのである。その結果、第三帝国の寓意であったはずの『聖書に曰く』は、スイスの寓意ともなったのだった。

#### 5. 意味にあらがう寓意劇 — マックス・フリッシュ『ビーダーマンと放火犯たち』

松鷯 功記

1958年チューリヒ劇場初演の『ビーダーマンと放火犯たち』は、ヴェルターリン時代最後のフリッシュ作品である。フリッシュを論じる場合、小説や物語は個人の問題、演劇やその他の散文は政治的というように、テーマが明白に別れる傾向にある。これに対して本報告は、散文、ラジオドラマとメディアを横断しつつ展開し、演劇へと至ったこの寓意劇を手がかりに、フリッシュ作品における個人的なものとの政治的なものとの関連性とその特徴を探る。

フリッシュによれば、寓意劇とは意味-劇<Sinn-Spiel>であり、それは劇が生み出す抽象的<意味>を通して、複数の現実を多様に想起させる。同時に寓意劇は例証的性質を持ち、教育・教訓的<意味>を免れがたい。しかし劇の副題 *Ein*



*Lehrstück ohne Lehre* が示す通り、警告し教えても学ばないビーダーマンの行為は、教育・教訓的に<意味なし>である。不正を行ったという個人的意識が、それと関連のない別のできごとへの対処に影響を与える：これが散文「茶番喜劇」をはじめ一連のビーダーマン素材のテーマであり、彼が学ばないことの個人的原因である。「茶番喜劇」はチェコスロバキアの共産主義化とそれに対するスイス市民社会の冷めた反応に出遭ったことをきっかけに書かれた。寓意劇では逆に、寓意として想起される政治的なものを背景に、ビーダーマンの個人的な意識が演じられる（語られる）。

### 口頭発表：語学（14:30～16:25）F 会場（西 2-401 教室）

司会：平井 敏雄／田中 雅敏

1. モーツァルト家の人びとが書簡に書き綴ったドイツ語 — 私的空間における標準語と方言の競合

佐藤 恵

ドイツ語圏南東部においては 18 世紀中葉以降に、ウィーンの（東）上部ドイツ文章語が声望を失い、東中部ドイツ語型の標準文章語に切り替わっていった。発表者は、東上部ドイツのモーツァルト家の人びと（W. A. モーツァルト [以下、「アマデウス」と略]、その父、母、姉、2 人の息子）が 1755 年から 1857 年まで三世代にわたり書き綴った書簡文（約 60 万語）を集積して、標準形と方言形の出現状況を調査した。

父レオポルトは教育程度が高く、東中部ドイツ語型の標準文章語を推奨する Gottsched の文法書（1752 年）を心得ており、ほぼ一貫して書簡で標準形を使用している。ただし、愛犬や食事の話など打ち解けた話題については、家族宛に書くときには、レオポルトにも上部ドイツ語形が散見される。一方、母アンナの書簡には、上部ドイツ語形が目立つ（例: *Dag* < *Tag*, *heunt* < *heute*, *wür* < *wir*, *seind* < *sind*, *Empfängnus* < *Empfängnis*）。父から教育を受けたアマデウスは標準形を全般的に用いているが、姉、従妹、親しい友人宛の書簡では上部ドイツ語形も目につく。それが、19 世紀のアマデウスの息子の世代になると、兄弟間の書簡ですら上部ドイツ語形が見当たらなくなる。このように、標準語と方言の選択は、書き手の教育水準と世代という社会的変数のほか、親しい人に宛てたものか、書簡がなにを話題にしているのか、という語用論的変数にも依存すると考えられる。

## 2. 現代ドイツ語における接尾辞の生産性と文体差について：コーパスに基づく計量的概観

今道 晴彦

受容語彙が数千語レベルに達する中級学習者が、語彙力を強化し、語彙知識を深めるためには、造語法に対する理解が不可欠になる。とくに接辞学習は語彙学習上の重要課題のひとつに位置づけられ (Nation, 2001), ドイツ語の学習辞書には接辞を見出しに掲げ、生産性に関する情報を提供するものも見られる。

しかし、生産性の基準が示されているわけではなく、どの接辞の、どの特徴を、どの順序で扱うのかについての共通認識が形成されているわけでもない。

また、中級レベルになると、学習の重心は日常会話 (話し言葉) から書き言葉に移る。両者の類似性や非類似性が示されると、学習者の参考になると思われるが、実証的な調査はなされていないと思われる。

本研究では、新聞、学術書、映画字幕、ブログの4コーパスを用いて、形容詞をつくる15種の接尾辞の生産性 (エントロピー) に文体差が見られるのかを計量的観点から検証する。具体的には、(1) 総合的に生産性が高いのはどの接尾辞か、(2) 接尾辞の生産性に文体差は見られるか、(3) 文体差を示す接尾辞にはどのような特徴が見られるか、の3つのリサーチクエスチョン (RQ) を設定し、統計手法を用いて分析を行なう。

本発表では、学習辞書による生産性の評価との間に乖離が見られること (RQ1)、接尾辞の生産性には文体差が見られること (RQ2)、接尾辞の多くは書き言葉に顕著で、名詞文体で好んで使用されること (RQ3) などが明らかになったことを報告する。

## 3. オットフリートの『福音書』における古高ドイツ語動詞接頭辞 *gi-* について

野添 聡

本研究の目的はゲルマン語における動詞接頭辞 *ge-* (ahd. *gi-*) の機能を古高ドイツ語の文献であるオットフリートの『福音書』の用例を用いて実証し、接頭辞 *ge-* の衰退の要因のひとつと考えられている分析的な完了の形式との競合について過去完了的機能の観点から競合関係を示唆することである。

古代のゲルマン語における接頭辞 *ge-* は完了相を表す機能を持ち後代に発達した分析的な完了の形式との競合の結果、衰退したと考えられている。先行研究では古高ドイツ語の接頭辞 *gi-* の完了相を表す機能の有無に関して意見が対立して

おり、最近の先行研究では接頭辞 gi- が古高ドイツ語において衰退し形骸化していると考えられている。

本研究の調査対象であるオットフリートの『福音書』には完了相を表す接頭辞 gi- の用例と機能を持たない用例が共に在証されることから、本研究ではオットフリートの『福音書』における接頭辞 gi- が衰退の途上にあると主張する。また接頭辞 gi- の衰退が写本間における接頭辞 gi- の表記の差異に反映していると考えられることから、本研究ではオットフリートの『福音書』の後代に成立した写本における接頭辞 gi- の欠落の傾向を指摘し接頭辞 gi- が衰退の途上にあることを文献学的に裏付ける。また分析的な完了の形式との競合関係についてはこれらの形式が実際にどこまで競合していたかほとんど言及されていないが、本研究では過去完了的文脈における機能の類似性を指摘することで競合関係の側面を明らかにする。

#### シンポジウムⅣ (14:30~17:30) G 会場 (西 2-402 教室)

Symposium IV Gefühlsunordnungen: Heinrich von Kleist und die romantische Ökonomie der Affekte

Moderator: Thomas Pekar

Themenbeschreibung für das Symposium:

Affekte, Gemütsbewegungen, Leidenschaften sind Gegenstand diskursiver Kontrollen und gesellschaftlicher Codierungen. Im Kontext der Geschichte der Affektregulierungen nimmt das Werk Kleists eine Sonderstellung ein, werden darin doch immer wieder Affekte aus ihren diskursiv-sozialen Verankerungen und dem Gehäuse der Innerlichkeit in eine Äußerlichkeit gerissen. Liebe, Hass und andere Emotionen werden zu flottierenden Affekten – austauschbar, wie ‚Küsse‘ und ‚Bisse‘ in Kleists Drama *Penthesilea*, oder schwankend, wie in seiner *Familie Schroffenstein*, wo im Affektaumel ein Totschlag „aus Versehen“ geschieht.

Die Kleist-Forschung hat dieses besondere Verhältnis Kleists zu den Affekten verschiedentlich schon zu ihrem Gegenstand gemacht, wenn sie beispielsweise nach seinem Verhältnis zur romantischen Gefühlskultur des 18. Jahrhunderts gefragt hat. Die neuere Forschung hat besonders auf die Unterschiede hingewiesen, die zwischen Kleists Affekten und dem emotionalen Stil der Romantik bestehen.

Anknüpfend an solchen Forschungsergebnissen will sich das Symposium aus literatur- und kulturwissenschaftlichen Perspektiven mit den Affekten bei Kleist auseinandersetzen. Die Zeit um 1800, als Übergangszeit zur Moderne, war von einer fundamentalen Änderung in den emotionalen Begriffen und Semantiken bestimmt. Vor allem ist der Aufstieg des

‚Gefühls‘ zu beobachten, welches im Laufe des 18. Jahrhunderts als etwas Moralisches und Ästhetisches betrachtet und von den immer mehr als negativ angesehenen Affekten abgegrenzt wurde. Kant nennt so die Affekte ‚unbesonnen‘, während er das ‚Gefühl‘ als eine Leistung der Vernunft honoriert.

Vor diesem kultur- und psychohistorischen Hintergrund werden im Symposium die Affekte bei Kleist neu beleuchtet: So werden sie im Spannungsverhältnis zur Gefühlsökonomie der Romantik und ihren Codierungen, die im romantischen Diskurs der Liebe zu finden sind, analysiert. Dafür ist Kleists *Penthesilea* eine Paradebeispiel. Kleists Haiti-Novelle *Die Verlobung in St. Domingo* wird aus postkolonialer Perspektive unter der Frage untersucht, wie im Verhältnis zwischen den ‚Rassen‘ der Affekt der Abjektion wirksam wird. *Das Erdbeben in Chili* wird als originelle Fortsetzung der Paradies-Geschichte in ihrer paradoxen Affekt-Struktur gelesen. Das spezifisch Kleist'sche ‚Rechtgefühl‘ wird am Beispiel seines *Michael Kohlhaas* diskutiert; abschließend werden die politischen Affekte bei Kleist, die sich besonders in seiner *Hermannsschlacht* entladen, in origineller Weise mit zeitgenössischen elektrischen Theorien verbunden.

## 1. Der amouröse Diskurs in Kleists *Penthesilea*

Yixu Lu

In der Forschung wurde oft schon auf das symmetrische Versagen der Kommunikation auf dem „Schlachtfeld“ der Gefühle hingewiesen. Zärtlichkeit und Mordlust bestehen in *Penthesilea* unmittelbar nebeneinander. Was im Text, d. h. in Penthesileas Rede, zwangsläufig als Sequenz erscheint, ist eigentlich ein Nebeneinander gegensätzlicher Gefühle. Man könnte diesbezüglich von der Gleichzeitigkeit des Gegensätzlichen sprechen. Nachdem Penthesilea Achill in wilder Raserei getötet hat und wie aus einem Traum erwacht, erscheint ihr die Gräuel-Tat wie ein Rätsel. Wenn im Vortrag das „Greuel-Rätsel“ etappenweise enträtselt wird, dann so, dass die gegensätzlichen Aspekte von Penthesileas gespaltenem Wesen in ihrer ganzen Unverträglichkeit exponiert werden. Nachdem sich Penthesilea ihrer Tat langsam bewusst wird, eine Träne vergießt und eine rituelle Selbstreinigung vollzieht, so bleibt die Katharsis, die sich zeitweilig einstellt, dennoch flüchtig und bringt keine wirkliche Erleichterung. Stattdessen drängt der Affekt des Ekels nach außen. Offen aber bleibt die Frage, wie Penthesileas Schlussmonolog und Freitod zu verstehen sind. Bei der Beantwortung wäre zu berücksichtigen, dass in der Phase des Ekels sich die Funktion der Sprache verändert, denn sie dient nicht mehr dazu, das Geschehen und die Motive der Tat zu verschleiern. In der direkten Konfrontation mit der Leiche des Geliebten wird die Sprache von einer schonungslosen Wirklichkeit erfasst, die keinen anderen Ausweg zulässt, als das Todesurteil über sich selbst zu verhängen.

## 2. „Begierde und Angst“. Die Abjektion gegen Hybridität in Kleists Haiti-Novelle

Thomas Schwarz

Der Vortrag thematisiert die Dynamik von Vertrauen und Misstrauen in Kleists *Die Verlobung in St. Domingo*. Die Novelle antwortet auf eine Frage, die sich kolonisierenden Mächten im Zusammenhang mit der sexuellen Hybridisierung stellt: Auf welche Seite schlägt sich ‚der Bastard‘ in der antikolonialen Rebellion? Die „Mestize“ Toni, Tochter eines Franzosen und einer schwarzen Sklavin, gerät in einen Loyalitätskonflikt: Der Rebellenführer Congo Hoango kritisiert sie als „Bundbrüchige“, die Mutter klagt sie als „Verräterin“ an. Die hybride Figur Toni entscheidet sich zwar für eine Identität als „Weiße“. Doch der Schweizer Kolonialsoldat Gustav tötet sie im Affekt, was gewöhnlich als Resultat einer Vertrauenskrise behandelt wird.

Die These ist, dass das Vertrauen Gustavs in Toni unterminiert wird durch eine reflexartige Abstoßung von Hybridität. Toni flößt Gustav eine „Mischung von Begierde und Angst“ ein. Während weiße Hautfarbe sein Vertrauen befestigt, löst die Wahrnehmung schwarzer Hautfarbe ‚Entsetzen‘ aus. Gustavs erotisches Begehren vermag den Abjektionsmechanismus nicht außer Kraft zu setzen. Attraktion und Abjektion gegenüber der im Text als ‚gelb‘ markierten Hybridfigur halten sich die Waage. Doch im blutigen Finale setzt sich ein „widerwärtiges und verdrießliches Gefühl“ durch.

## 3. Rechtgefühl und Gewalteskalation in Kleists *Michael Kohlhaas*

Arne Klawitter

Indem die Leidenschaften und Affekte gleich zu Beginn vom Erzähler selbst auf das Recht bezogen werden (auf Rechtschaffenheit und den Anspruch auf Recht vor dem Gesetz), gibt die Erzählung gleichzeitig ein Interpretationsmuster für den Text vor und unterwirft die Gefühlsunordnung gewissermaßen einer diskursiven Ordnung und damit einer Kontrolle, was schließlich in die weithin anerkannte Deutung mündet, dass Kohlhaas sich unrechtlicher Mittel bediene, um (sein) Recht zu bekommen. Dem entgegen steht der Moment des Umschlagens von Rechtsgültigkeit und Rechtsanspruch in exzessive Gewalt, die ihr politisch-historisches Pendant, wie Friedrich Kittler (im Anschluss an Wolf Kittler) gezeigt hat, im Preußischen Landsturmedikt von 1813, der Volksbewaffnung sowie der „Jägertaktik“ kämpfender Bürger, was Kleist, selbst preußischer Offizier (Leutnant), in seinen Erzählungen *Das Erdbeben von Chili* (1807) und *Michael Kohlhaas* (1810) gewissermaßen vorwegnahm. Interessant scheint in dieser Hinsicht das Situationspotential einer Selbstbewaffnung, die Recht und Gesetz überhaupt in Frage stellt, d.h. dem rechtlichen System den Boden entzieht, weil es sich nicht als souverän und unumschränkt gültig, sondern als ein Mittel der Macht erweist, genauer gesagt: der Mächtigen, um ihre

Macht zu sichern. An Kittlers Überlegungen anschließend, versuche ich die Praxis des Partisanen im Kohlhaas darzustellen und daraus Schlussfolgerungen in Bezug auf Kleists eigene „Diskurspraxis“ zu ziehen.

#### 4. Das Paradies als paradoxe Strukturformel in Kleists Novelle *Das Erdbeben in Chili*

Thomas Pekar

Das Böse steht bei Kleist nicht mehr in einer binären Struktur dem Guten gegenüber (etwa, wie bei Kant, im Inneren des Menschen), sondern taucht in eigentümlichen Mischungsverhältnissen auf. Abhängig von schwankenden Affektlagen schlägt das Pegel mal hierhin, mal dahin aus, mal ins Böse/Katastrophale, mal ins Gute/Glückliche. Das Böse ist so kein Absolutum mehr, sondern das Ergebnis ambivalenter Affektlagen. Böse ist nicht die Differenz zum Guten, sondern die Möglichkeit zur Differenz selbst, also das Böse im Guten (wie das Gute im Bösen), die Gemengenlage und das Ununterscheidbare. Diese grundsätzlichen Einsichten werden im Vortrag auf Kleists Sicht des Paradieses übertragen, indem es zunächst einmal von seiner Beziehung zur Idylle abgelöst wird. Das Paradies soll hingegen als die ‚ganze‘ Geschichte von Adam und Eva verstanden werden, also als die Geschichte, die auch den Sündenfall und die sich daran anschließende Vertreibung aus dem Paradies umfasst. Im Vortrag wird am Beispiel von Kleists Novelle *Das Erdbeben in Chili* (1807) diese grundsätzliche Ununterscheidbarkeit von gut/böse, d.h. also die Einheit von paradiesischem Glück und aus der Vertreibung aus dem Paradies resultierendes Unglück am Beispiel der Handlungsszenenfolge analysiert. Den einzelnen Szenen ist ihr Gegenteil jeweils latent eingeschrieben. In einem zweiten Schritt wird im Vortrag diese grundsätzliche Neubestimmung des Paradieses mit Kleist eher theoretischer Einschätzung des Paradieses verglichen, wie er sie in *Über das Marionettentheater* (1810) äußert.

#### 5. Der unkontrollierbare Gewaltausbruch der elektrisch aufgeladenen Nation. Die Affektmanipulation und der Zufall in Kleists politischen Texten

Hirosuke Tachibana

Kleists Aufsatz *Über die allmähliche Verfertigung der Gedanken beim Reden* führt aus, wie produktiv der verunsicherte Gemütszustand ist. Wenn man nämlich im durch die situative Not gereizten Gemütszustand etwas redet, dann entsteht ein heilbringender Gedanke quasi von selbst. Dieser Gedankenverfertigung ist die reflexive, zielbewusste Planung vielmehr abträglich. Um diesen Prozess zu veranschaulichen, wird hier die Metapher der elektrischen Influenz eingeführt. Da die elektrische Auf- und Ausladung im zeitgenössischen experimentalphysikalischen Diskurs als plötzliches, der menschlichen Vernunft unerklärliches und unkontrollierbares Phänomen wahrgenommen wird, werden

diese Charaktere mittels der Metapher auch dem Gedankenverfertigungsprozess zugeschrieben. Der daraus resultierende Gedanke ist ebenso wie das Ergebnis eines physikalischen Experiments nicht vorauszusehen. Dieselbe Metaphorik taucht auch in einem Abendblatt-Artikel auf, in dem Kleist über den Aufstand der deutschen Nation reflektiert. Hier wird die Nation dem Körper eines paralytischen Mannes vergleichbar gemacht, der in der äußersten Lebensgefahr, die ein „zufällig“ entstandenes Feuer herbeiführt, unbewusst die Gewalt manifestiert. Und dieser explosionsartige Gewaltausbruch eines menschlichen Körpers ist es, der hier mit der Elektrizität analog gemacht wird. Durch diese doppelte Metaphorisierung wird auch der Gewaltausbruch der Nation als ein unkontrollierbares Phänomen vorgestellt, dessen Verwirklichung von der zufällig einbrechenden Gefahr abhängig ist, die ihren Gemütszustand elektrisch affiziert, um sie dann explodieren zu lassen. In meinem Vortrag gilt es, von diesem Bild des politischen Kollektivs ausgehend, Kleists Drama *Die Hermannsschlacht* zu analysieren.

#### 口頭発表：文学Ⅱ / 文化・社会（14:30～17:45）H会場（西 2-501 教室）

司会：荒井 泰／木村 裕一

##### 1. 第二次世界大戦中のドイツ軍兵士の読書について

竹岡 健一

ナチス時代の文学受容については、1933年から1945年間の本の刊行数などに基づいて、必ずしもイデオロギー的な著作一辺倒ではなかったとの指摘もなされており、その際、第二次世界大戦勃発以後、前線で戦うドイツ軍兵士の間で娯楽的な読み物の需要が著しく高まり、啓蒙宣伝省がそれに呼応する対策をとったことが特に強調されている。そうした研究にイデオロギー重視の考察では捉え難い有益な知見が多々含まれていることは確かであり、兵士が娯楽的な本を求めたということももっともなことのようと思われる。だが、啓蒙宣伝省の前線兵士向け推薦図書リストの内容や、同省が推進した野戦郵便による前線兵士への本の送付に応じて多数の出版社が刊行した「野戦郵便図書」の内容、および前線でのドイツ軍兵士への本の販売に関する同時代の報告の内容を考慮したとき、前線兵士の読書の欲求に娯楽的著作への偏りを見ることは、必ずしも妥当ではない。本発表では、これらに基づいて、次の3点を主張したい。1) 先行研究の主張とは異なり、ドイツ軍兵士の読書は娯楽的著作に偏っておらず、多様であり、名作や世界観的な著作にも高い需要が見られた。2) 先行研究では特に啓蒙宣伝省が娯楽的著作の供給に積極的であったとされるが、必ずしもそうとは言えない。3) 娯楽的著作の普及を根拠として、ナチズムのイデオロギー的破綻や、娯楽的著作の体

制維持機能を指摘することには、なお留保が必要である。

## 2. 日本とドイツの学問的伝統の複合性 —カール・フローレンツ『日本文学史』における「文化」の発展段階説

馬場 大介

本発表では、1889年から1914年まで（東京）帝国大学のドイツ文学科で教師を務めた東洋文献学者カール・フローレンツ（Karl Florenz, 1865–1939）の主著『日本文学史』（*Geschichte der japanischen Litteratur*, 1906）を取り上げる。日本語の習得が困難な状況にあったフローレンツは、ドイツ語を学んでいた同僚の国文学者芳賀矢一（1867–1927）から日本文学の手解きを受けていた。他方でフローレンツは、そうして収集した知識をもとに文学史を起草する際、ドイツ語圏の読者がよく理解できるよう、ヴィルヘルム・シェーラー（Wilhelm Scherer, 1841–1886）の『ドイツ文学史』（*Geschichte der deutschen Litteratur*, 1883）の記述方法に依拠していた。以上に基づき発表者は、『日本文学史』を、日独の学問的伝統がフローレンツによって組み合わされた著作として仮定的に規定する。先行研究では一切指摘されてこなかったこの視点から、その複合性の定義に必要な概念について触れた上で、文学史記述の構成を説明する。特にその中核をなす日本「文化」（Kultur）の発展段階説に焦点を当て、その記述のあり方を、フローレンツと芳賀に関わる日独両方のコンテクストを踏まえて検討する。この分析を通じて、国民文学という日独の間で共通した理解の枠組みの中で、フローレンツが、明治国学の領域で支持されていた一国家一言語の文明観とドイツの文学研究に伝統的な一国民一言語の文化観との相違を、自身の置かれていた制約に応じてどのように相殺していったのかを明らかにしたい。

## 3. 可視化される無限性—フリードリヒ・シュレーゲル『ルツィンデ』における図像性の表れ

高次 裕

シュレーゲルが書き残した膨大な断片の中には「文学」「詩」「哲学」「無限性」などについて彼自身が描いたスケッチがある。それらのスケッチを辿っていくと、彼が言語的、概念的に完成されたものを後から図像化したのではなく、彼がそれらの概念について思考する際の思索過程に関わっていたのではないかと考えることができる。シュレーゲルが描き、その図像性において思考した実践が具体的に表れているとみることができる例を彼の文学作品『ルツィンデ (Lucinde)』（1799）



において確認することができる。シュレーゲル自身が描いた「無限性」に関するスケッチとぴったり対応しているとみることができる記述が、作品の後半にある「省察」と題された章に見られるのである。本発表では1. シュレーゲルが、例えば彼の思想の中心概念の一つ「無限」について思索する際に、言語的、概念的に思考するのみならず、スケッチを描きその図像性の側面からも思索を展開していること。2. それは（言語的、概念的に汲みつくせぬ）何かを可視化する、見えるようにする（sichtbar machen）ことであること。3. 可視化されたものの図像性におけるシュレーゲルの思考が彼の文学作品『ルツィンデ』に見て取れることについて論じたい。

#### 4. H. v. ホフマンスタール台本/R. シュトラウス作曲のオペラにおけるズボン役 — モデルネから保守へ

関根 裕子

オペラにおいて女性歌手が演じる男性役は、ズボン役（die Hosenrole）と呼ばれる。ズボン役は、18世紀モーツァルトのオペラから現代までの多くの作品で、音楽面、視覚面で「第三の性」として観客を魅了するばかりでなく、衣装交換、異性装などが劇の展開に大きく関わることで、重要な役柄となっている。

ホフマンスタール台本/R. シュトラウス作曲の共同制作による6つのオペラのうち、3作品にズボン役、すなわち『ばらの騎士』（1911）のオクタヴィアン役、『ナクソス島のアリアドネ』（1916）の作曲家役、『アラベラ』（1932）のツデンカ役が登場する。この中で『ばらの騎士』と『アラベラ』には、ホフマンスタールの思想が、第一次世界大戦を挟んでモデルネから保守的なものへと変化したことが作品に反映されており、ズボン役にも影響を及ぼしていると論じられてきた。

しかし、『アラベラ』の原作である、家の経済的理由で男装しているルツィルが主人公の短編小説『ルツィドール』は、1910年の発表後『アラベラ』制作中まで、何度も映画版、ボードヴィル版など異なるジャンルに書き換えられており、ホフマンスタールのこの素材へのこだわりが見られる。

一見、開放された新しい女性像であるアラベラが保守的な結婚へと収まる話のように映るが、隠れた主人公であるズボン役ツデンカの言動に注目すれば、その心理描写、無意識なエロスへの衝動と行動という点で、保守的な中に革新的な女性が描き出されているといえよう。

## 5. Gesellschaft und Alltag in Prosa – DDR Literatur als zeitgenössische Quelle für Alltagskultur

Maria Büttner

In der Betrachtung der Literatur aus der DDR muss die Darstellung des Alltag und der damit verbundenen Gesellschaft und Kultur ebenso zentral sein wie die Analyse ihrer politischen und systemkritischen Aspekte. Sie ist zeitgenössischer Kommentar nicht nur zu Politik und Gesellschaft, sondern ebenso zum täglichen Leben. Der Jugendroman *Ankunft im Alltag* von Brigitte Reimann wird zum Namensgeber einer literarischen Richtung, der „Ankunftsliteratur“. Diese Erzählliteratur handelt von der erwünschten sozialistischen Selbstfindung junger Menschen, aber auch von Alltag. In der Prosa finden sich auch Darstellungen zeitgenössischer Kultur und Lebenswelt, z.T. unter Verwendung eigenen Vokabulars. Sprache selbst wird so Alltagsmerkmal, auch Herkunftsmarkierung, einem Dialekt oder Soziolekt ähnlich. Der Fall der Mauer jährt sich 2019 zum 30. Mal. In der Populärkultur der letzten 30 Jahren wurde DDR-Kultur oftmals ironisch (*Good Bye Lenin*), nostalgisch („Ostalgie“) oder als randständiges Erzählmotiv (*Das Leben der Anderen*) betrachtet. Mit Gerd Dietrichs *Kulturgeschichte der DDR* (2018) erschien eine umfassende Darstellung derselben. Als Nachschlagewerk verwendetet es einen für unsere Zwecke zu weit gefassten Begriff von Kultur. Anhand dreier Autorinnen – Brigitte Reimann (1933-1973), Irmtraud Morgner (1933-1990) und Brigitte Struzyk (1946) – soll ein Augenmerk auf Aspekte der Gesellschafts- und Alltagsdarstellung in Erzählliteratur gelegt werden. Was lässt sich aus diesen auch zeitgeschichtlichen Dokumenten erfahren?

ポスター発表 (13:00~14:30) | 会場 (その1) (西 2-303 横多目的スペース)

### 1. Nutzung der Zielsprache über Facebook von Deutsch- und Japanischlernenden

Axel Harting

Der Beitrag widmet sich den Ergebnissen einer im Mai 2018 durchgeführten Befragung unter Deutsch- und Japanischlernenden (n=210) zur Nutzung und zum Erlernen der jeweiligen Zielsprache über das soziale Netzwerk Facebook. Zahlreiche Studien aus unterschiedlichen Ländern verweisen auf die Vorzüge sozialer Medien für das Fremdsprachenlernen. Positive Auswirkungen auf die Ausbildung einzelner sprachlicher Teilfertigkeiten wurden u. a. für die Schreibkompetenz, für Erweiterungen im Bereich Wortschatz und Ausdruck sowie für die Entwicklung sozio-pragmatischer Kompetenz nachgewiesen. Mit der hier geschilderten Befragung sollte genauer ermittelt werden, wie Auswirkungen von Facebook auf das Fremdsprachenlernen von Seiten der Nutzerinnen und Nutzer wahrgenommen werden. Dabei hat sich herausgestellt, dass der Reiz des Netzwerks vor allem darin besteht, mit der Zielsprache und -kultur in Berührung zu

kommen, mit Muttersprachlern der Zielsprache über Distanzen hinweg zu kommunizieren, Kontakte zu Muttersprachlern zu knüpfen bzw. aufrechtzuerhalten und sich in der Zielsprache mitzuteilen. Als problematisch wurde der auf Facebook übliche, formalsprachlich häufig nicht korrekte Sprachstil angesehen sowie auch ein Mangel an Feedback auf sprachliche Fehler in den eigenen Beiträgen.

## 2. Untersuchung zu den Ursachen der Angst vor Fehlern japanischer Studierender beim Fremdsprachenstudium

Marco Schulze

Stellt man das Problem der Angst vor Fehlern an japanischen Universitäten zur Diskussion, wird schnell klar, dass niemand die Existenz dieses Phänomens anzweifelt. Aber warum leiden scheinbar so viele Studierende in Japan unter dieser Angst? Schaut man sich die international erhobenen Zahlen und Rankings an, gehören japanische Schulen, Universitäten und Wissenschaftler zu den Eliten im Weltvergleich. Anstatt Angst würde man also eher mit einem hohen Selbstbewusstsein rechnen. Jedoch lehrt uns die Erfahrung, dass dies nur selten der Fall ist und der Eindruck von Schüchternheit und geringem Selbstvertrauen dominiert. Versucht man, dieses Phänomen zu erklären, werden zumeist soziokulturelle Aspekte und Einflüsse angeführt. Diese sind auch objektiv unbestreitbar. Doch in meinem Vortrag versuche ich, auf die entwicklungsbiologischen und -psychologischen Gründe einzugehen, um anschließend aufzuzeigen, dass auch im Bildungssystem und in der Struktur sowie der Auswahl pädagogischer Mittel und Methoden Ursachen für das Auftreten dieser Ängste begründet sind. Ich werde verdeutlichen, wie bemüht man in Japan ist, Bildung so gerecht, aber auch angst- und stressfrei wie möglich zu gestalten. Dies scheint nun ein Widerspruch zu dem oben Ausgeführten zu sein. Ist es aber nicht. Denn genau hierin liegt eine Ursache des Dilemmas, welches sich besonders beim Fremdsprachenlernen manifestiert.

## 3. Was sollen die Studierenden am Ende des Grundstudiums können? – Meinungen (Beliefs) von Deutschlehrenden an japanischen Universitäten

Elvira Bachmaier

In der Forschung sowie der persönlichen Erfahrung zeigt sich, dass Lehrende, obwohl sie häufig eine ähnliche Zielgruppe unterrichten, mitunter sehr unterschiedliche Überzeugungen („Beliefs“) hegen, was die verschiedenen Bereiche des Lehrens und Lernens angeht (für die japanische DaF-Lernumgebung s. jüngst z.B. Morita 2017, Ohta & Schart 2018 oder Bachmaier 2017). Besonders das Spektrum der Überzeugungen beim Thema Lernzielorientierung verdient besondere Aufmerksamkeit.

Dabei stellen sich die Fragen:

Die Vermittlung welcher Kompetenzbereiche halten Deutschlehrende in Japan persönlich für besonders wichtig bzw. eher unwichtig?

Gibt es Zusammenhänge mit anderen Parametern wie z. B. der Berufserfahrung oder dem Fachgebiet der Lehrenden? Und wenn ja, welche?

Um dies zu untersuchen, wurde von Juli bis August 2018 eine Online-Umfrage unter DaF-Lehrenden an japanischen Universitäten durchgeführt. Die Untersuchung erfasste anhand 5-stufiger Likert-Skalen, für wie wichtig die Lehrenden persönlich die Vermittlung verschiedener Kompetenzbereiche im Deutschunterricht halten. Ihre Bewertung begründeten die Untersuchungsteilnehmenden dann in einem Kommentarfeld.

Die Präsentation gibt Einblicke in die Ergebnisse der quantitativen und qualitativen Umfrageanalyse und zeichnet ein erstes Meinungsbild der befragten Deutschlehrenden darüber, welche Kompetenzen die Studierenden sich in den ersten beiden Lernjahren Deutsch im Haupt- und Nebenfach aneignen sollten.

**ポスター発表 (13:00~14:30) | 会場 (その2) (西 2-403 教室横多目的スペース)**

**4. Was macht eine gute Lernergrammatik aus? Japanische und deutsche Lernergrammatiken im kritischen Vergleich**

**Nina Kanematsu**

Dieser Beitrag beschäftigt sich im Rahmen einer größeren Studie zur Darstellung von Nebensätzen in japanischen und deutschen Lernergrammatiken mit der Konzeption ebendieser im Hinblick auf die Beschreibung von Subjekt- und Objektsätzen, indirekten Fragesätzen und Relativsätzen. Betrachtet wird die Grammatikerklärung sowohl unter einem inhaltlichen Aspekt, als auch anhand formaler Kriterien wie der Darstellungsform. Ebenso wird metasprachlichen Hinweisen und der Vermittlung von Lernstrategien sowie der Form und Qualität der gegebenenfalls vorhandenen Übungen Beachtung geschenkt. Anhand der Analyse einer Auswahl an deutschen und japanischen Lernergrammatiken werden unter anderem folgende Thesen überprüft und begründet: 1. Japanisch verfasste Lernergrammatiken weisen die Tendenz auf, bei der Grammatikerklärung kontrastiv vorzugehen. 2. In japanischen Lernergrammatiken findet man häufiger als in deutschen Lernergrammatiken zielgruppenspezifische Hinweise vor. 3. In japanischen Lernergrammatiken nimmt die Visualisierung einen höheren Stellenwert ein als in deutschen Lernergrammatiken. 4. Deutsche Lernergrammatiken verfolgen das Prinzip der Vollständigkeit und Ausführlichkeit strenger als japanische Lernergrammatiken.

Insbesondere soll die Konzeption der Lernergrammatiken auch hinsichtlich ihrer Eignung für den Einsatz im Unterricht und der Berücksichtigung der Lernerautonomie diskutiert werden.

## 5. Deutsche Sprache und Kultur im außerschulischen Kontext in Japan – eine Fallstudie

Maria Blödel

Deutsche Sprache und deutsche Kultur werden in Japan häufig auf den schulischen oder universitären, d. h. den institutionellen Bereich bezogen. Aber auch außerhalb davon, z. B. in der japanisch-deutschen Gesellschaft, in kommunalen Kursen oder in den zahlreichen 'deutschen Dörfern' entsteht ein sprachlicher und kultureller Austausch.

Im Freilichtmuseum Little World – Museum of Men (Inuyama, Präfektur Aichi) lässt sich beobachten, dass vor allem die Hemmschwelle, mehr über andere Kulturen und Sprachen zu erfahren, gesenkt wird. Das Museum bietet die Möglichkeit nicht nur durch Besichtigung von Ausstellungsstücken sondern insbesondere durch Ausprobieren in andere Kulturen einzutatuchen und sich darüber zu informieren. Der deutsche Bereich führt Besucher und Schulklassen nicht nur in die deutsche Sprache und Kultur ein, sondern bietet auch die Möglichkeit, traditionelle Kleidung (民族衣装) selbst anzuprobieren. In diesen Rahmenbedingungen wurde eine Fallstudie zu den Reaktionen der Besucher auf dieses Kennenlernen der anderen Kultur durchgeführt.

Es ließ sich in dieser Zeit beobachten, dass sich die Besucher in unterschiedliche Kategorien einteilen ließen. Personen die noch keinen Kontakt mit Deutschland oder der deutschen Sprache hatten (Gruppe 1) und diejenigen, bei denen der Kontakt bereits besteht (Gruppe 2). Beide Gruppen ließen sich jeweils in weitere 2 Untergruppen einteilen (Gruppe 1-1, 1-2, 2-1, 2-2), welche auf die Motivation und die persönliche Einstellung zu dem Thema zurückgeführt werden konnten. Gruppen, die sich unter Zwang Wissen aneignen mussten (z. B. in Schulklassen) zeigten zunächst weniger Motivation, als diejenigen, welche nach eigenem Wunsch ihr Wissen erweitern konnten. Während Gruppe 1 hauptsächlich aus Schülern bestand, zu deren Aufgabe es gehörte traditionelle Kleidung anzuprobieren, bestand Gruppe 2 aus Studenten und Besuchern, bei denen bereits Vorwissen vorhanden war und sie aufgrunddessen die Kleidung anprobieren wollten. Durch den persönlichen Kontakt, in Form vom Anprobieren der Kostüme konnte festgestellt werden, dass dadurch die Motivation zur Wissenserweiterung in allen Gruppen erhöht wurde, egal ob es sich bei der Ausgangsbasis um eine gezwungene bzw. auferlegte oder ungezwungene bzw. freiwillige Situation handelte.

### **ブース発表Ⅰ（14:00～15:30）J会場（西 2-406 教室）**

#### **Innovation für die Ausbildung der Deutschlehrenden: Das DAAD-Projekt Dhoch3**

**Julia Weber, Manuela Sato-Prinz**

Dhoch3 ist eine interaktive Lernplattform für angehende Deutschlehrende. In insgesamt acht Studienmodulen, die von Fachleuten aus deutschen Universitäten federführend erstellt wurden, sollen Hochschullehrende und Studierende auf Masterniveau weltweit in die wissenschaftlichen Grundlagen des Fremdsprachenlehrens und -lernens eingeführt werden. Die Module sind seit Frühjahr 2018 kostenlos über eine Online-Plattform zugänglich und weisen ein hohes Maß an Flexibilität und Adaptierbarkeit an den Kontext des jeweiligen Landes und der jeweiligen Universität auf. Auf diese Weise soll ein Zusatzangebot geschaffen werden, das sich optimal in bestehende Strukturen integrieren lässt.

Vor dem Hintergrund einer steigenden Nachfrage nach Deutsch in vielen Ländern der Welt und einem sich abzeichnenden Lehrermangel möchte das Projekt einen Beitrag zur bedarfsorientierten Qualifizierung künftiger Deutschlehrender leisten. Zugleich arbeiten die Module aktuelle wissenschaftliche Erkenntnisse auf und reflektieren den Stand der Forschung im Fachgebiet Deutsch als Fremdsprache, die weit über didaktische und methodische Fragen hinausgehen. Als Blended-Learning-Angebot fördert Dhoch3 darüber hinaus die Digitalisierung der Hochschullehre in diesem Bereich.

In der Präsentation sollen das Projekt Dhoch3 allgemein und für alle Interessierte, unabhängig vom eigenen fachlichen Schwerpunkt, vorgestellt werden und seine Einsatzmöglichkeiten im japanischen Kontext der Germanistik und Ausbildung von Deutschlehrenden diskutiert werden.

### **ブース発表Ⅱ（16:00～17:30）J会場（西 2-406 教室）**

南チロルにおけるイタリア語系学校の CLIL を用いたドイツ語教育—ドイツ語系学校におけるイタリア語教育との比較において

**小川 敦・境 一三・大澤 麻里子**

イタリア・南チロルにはドイツ語系、イタリア語系、ラディン語系住民が暮らししており、それぞれの言語集団が独自の学校を有している。ドイツ語系はイタリア語で、イタリア語系はドイツ語で教科教育を行う CLIL（内容言語統合型学習）が導入されているが、その開始時期、政治的、歴史的な文脈、認識（捉え方）は異なっている。ドイツ語系住民は、南チロルでは数の上では多数派ではあってもイタリア全体では少数派であり、長い時間をかけて母語で教育を受ける権利を獲得して

きた。CLILはその権利を侵害しかねないため、慎重に漸次導入されている。一方、イタリア語系学校はCLILの手法を用いたドイツ語教育に非常に熱心であり、イタリア政府のCLIL導入に先駆けて行ってきた。この背景にはイタリア語系住民のドイツ語能力がなかなか向上せず、ドイツ語系住民のイタリア語能力と比較して劣るため、CLIL導入によってドイツ語能力の向上につなげたいという狙いがある。

本発表では、発表者がこれまで行ってきた文献調査や現地調査で得た知見を用いて、特に2019年3月に調査を行ったマンゾーニ小学校のドイツ語CLIL授業を例に、イタリア語系学校でCLILが教育現場でどう捉えられ、実践されているのか、ドイツ語系学校におけるイタリア語CLILと対比しながら考察する。南チロルにおけるCLILをめぐる状況を考察することで、ヨーロッパの複言語教育政策、ドイツ語の周辺地域、そして南チロル特有の文脈でドイツ語教育がどのように捉えられようとしているのかを提示する。

## 第2日 6月9日(日)

### 口頭発表：ドイツ語教育(10:00~11:55) D会場(西2-301教室)

司会：Thomas Pekar/高瀬 誠

#### 1. Meditation – Einsatzmöglichkeiten und Erfahrungen im Fremdsprachenunterricht

Luisa Zeilhofer

Die Einbeziehung von Achtsamkeitstraining („Mindfulness“) in den Bildungsbereich rückt immer mehr in den Fokus der Wissenschaft. Ein besonders großes Potenzial, den Unterricht zu bereichern, zeigen dabei Meditationsübungen, welche vermehrt mit der Verbesserung des akademischen, sozialen und emotionalen Lernens in Verbindung gebracht wird. Ramsbourg & Youmans (2013) untersuchten beispielsweise die Auswirkungen von Meditation auf das Wissenserhaltungsvermögen von Universitätsstudenten. Die Ergebnisse zeigten, dass Meditation die Retention der Vorlesung verbesserte. Shapiro et al. (2008) stellten fest, dass die Anwendung von Meditation in der höheren Bildung weitreichend ist und kognitive, affektive und zwischenmenschliche Bereiche beeinflusst. Da es bisher keine Forschung über Meditation in Kombination mit Fremdsprachenunterricht gibt, ist mein Forschungsprojekt in mehreren Punkten neu und zeigt, ob Meditation das Potenzial hat, den Fremdsprachenunterricht auf Universitätsebene zu verbessern. Meditationspraktiken wurden dazu über 3 Jahre in verschiedenen Fremdsprachenklassen mit unterschiedlichen

Methoden und Häufigkeiten implementiert. Obwohl die Achtsamkeitsforschung derzeit an Fahrt gewinnt, wissen wir immer noch zu wenig darüber, welche Programme funktionieren und was für wen und unter welchen Bedingungen positive Effekte erzielt werden können. Die Ergebnisse dieses Forschungsprojektes sollen einige dieser Fragestellungen beantworten – und dies speziell im Kontext des Fremdsprachenunterrichts.

## 2. 留学期間における学習者のドイツ語習得を定動詞の位置から考える：縦断的調査の結果より

星井 牧子

ドイツ語の語順習得に関しては、Pienemann (1998) の処理可能性理論 (Processability Theory, PT) により、「枠構造 (SEP)」 < 「主語と定動詞の倒置 (INV)」 < 「副文における定型後置 (V-END)」 という習得順序が提唱され、学習者の習得段階を測るための Profilanalyse (Grießhaber 2010) でも、同様の枠組みが用いられている。定動詞の位置に関する適切な使用からは、主語以外の要素が前域を占める構造 (XVS) のほうが、学習者にとっては定型後置よりも難しく、適切な使用のためには何が動詞前域となり得るかを理解する必要があることを示唆する調査結果もあり (Hoshii 2010, 2014, 星井 2016), PT でいう「処理可能」と「適切な使用」との間には一定の距離があると考えられる。

本報告では、日本語を母語とするドイツ語学習者 (大学生) 7 名を対象とした縦断的調査から、1 年間の留学前後の学習者の発話の変化を取り上げる。計 7 回のインタビュー発話および作文データの分析結果から、以下の傾向が確認された。

1) 留学期間を通じて、副詞をはじめとする主語以外の要素が前域を占める割合が増える傾向がある。2) V-END 段階に到達していても、\*XVS (XSV および doppelte Vorfeldbesetzung) が残る、あるいはまたは留学中に増える場合がある。3) 前域の長さ と XVS 構造の適切さは必ずしも関係しない。前域が 1 語の場合でも、XVS 構造には不安定さが残る。

この報告では、学習者の発話における「適切な使用」における話しことば規範の扱いなど、学習者言語の分析方法や今後の可能性についても議論したい。

## 3. Englisch als Hilfe zu DaF. Grenzen des vorhandenen Materials

Frank Nickel

Der Anspruch an Lehrwerke für Deutsch als Fremdsprache reicht von der Vermittlung der einzelnen Fertigkeiten, geht über Lernerautonomie, soll die Homogenität der Lernenden



berücksichtigen und vieles mehr. Dabei gewinnt aber auch die Mehrsprachigkeit seit den Forschungsergebnissen von Hufeisen und Marx u.a. an Gewicht.

Zur Mehrsprachigkeit wurde eine Untersuchung vorgenommen, um einerseits zu eruieren, wie viele Kognaten (hier: ähnliche Wörter des Englischen, Deutschen, Japanischen) in einem gängigen DaF-Lehrwerk vorhanden sind und ob diese von den Lernenden aufgrund ihres Vorwissens als solche erkannt werden können. Die vorhandenen Kognaten wurden hinsichtlich der vier Bestandteile lexikalischer Einträge im mentalen Lexikon untersucht und die Ergebnisse zur Übereinstimmung bzw. Abweichung werden in dieser Präsentation vorgestellt.

Die Untersuchung geschah vor dem Hintergrund, der Unterrichtsbeobachtung, dass vorhandenen Aufgaben zur Mehrsprachigkeit von den Lernenden nicht korrekt und – in diesem Sinne – nicht zielführend bearbeitet werden.

Schließlich werden Ergebnisse vorgestellt, anhand derer gezeigt wird, in welchen Fällen davon auszugehen ist, dass der Bezug auf das Vorwissen aus dem Englischen oder Japanischen (外来語) erfolgversprechend ist und wann nicht.

## シンポジウム V (10:00~13:00) E 会場 (西 2-302 教室)

フラグメントの諸相 – 文化的実践としての

### Fragmentarität als Kulturpraxis

司会：前田 佳一

ドイツ語圏文学史・文化史において「フラグメント」は Ostermann (1991) が述べるように人間の世界／文化把握における「主導的メタファー (Leitmetapher)」として機能してきた。すなわち「フラグメント」は世界あるいは文化の不完全性そのものを表象するための手段として用いられる傾向があり、とりわけそのつど想定される「全体」との関連において、しばしばある種の文化批判的契機を有してきた。本シンポジウムは「フラグメント」をめぐる文化的実践がこれまでどのようなようになってきたのか、そして文化にとって「フラグメント」はいかなる機能を有しているのかということ、中世から 20 世紀後半までの具体例を通時的に検討してゆくことを通じて明らかにする。なおここでの「フラグメント」の概念は文芸ジャンルとしての「断章」、未完の作品としての「断片」、文化理論あるいは詩的原理としての「断片性／フラグメント性」等を包含するものである。

文化的実践としてのフラグメントには概して<産出性>と<否定性>という二つの契機がみとめられる。すなわち未だ完成されざる「全体」へと向かう潜勢力を有したある種の萌芽として、あるいは「全体」の損傷や表象不可能性そのもの

を表象するためのモチーフあるいは詩的原理として、フラグメントは捉えられうる。本シンポジウムの各発表もまたこれらをめぐる議論が中心となるが、山本、二藤、深澤発表では<産出性>が、金、前田発表では<否定性>が特に前景化することになる。そして前三者においては特に各研究対象の時代のメディア状況との関連が、後二者においては作家個人の詩的实践が考察対象となる。山本発表は中世英雄叙事詩を対象とし、当時のメディア状況や受容状況をふまえつつ、「歴史」という「全体」の「断片」としての、そして「全体性」への拡張可能性を備えた「開かれたテキスト」としての英雄叙事詩の特性を明るみに出す。二藤発表はF・シュレーゲルの一連のテキストを手がかりに、彼の「フラグメント」をめぐる理論と実践との関連をさぐりつつ、そこに「断片性の美学」が生成してゆく契機を認めようとする。深澤発表はクラカウアーにおける鍵概念たる「アーカイブ」に着目しつつ、常にある種の「全体」へと再構成される潜勢力を備えた「断片」としての写真（イメージ）が有していた可能性を問う。金発表は初期ベルンハルトのテキストに潜在する<切断>のイメージが彼特有の反=物語としての断片性の詩学へと展開していく契機を捉えようと試みる。前田発表は20世紀前半のオーストリアの政治的変動が文学に与えた影響を踏まえつつ、それに対する若手作家の反応として断片性を志向する詩的实践が生起したことをG・フリツチュを例に、示す。

## 1. 「歴史」の断片 — ドイツ中世英雄叙事詩のフラグメント性

山本 潤

口伝の英雄詩はその受容に際し、受容者の持つ記憶による補完を前提かつ必要とする開かれたテキストである。そしてその伝承は文字によらない歴史伝承として機能するため、共同体の過去に関する記憶、すなわち歴史を「全体」とした場合に、個々の英雄詩は歴史の「断片」としての意味を持つ。そうした英雄詩を素材とし、13世紀以降にテキストの成立基盤を口誦性から書記性に移し書記文芸として詩作された英雄叙事詩は、開かれたテキストとしての特性を保つ一方で、「口伝されてきた過去にではなく、文学的な現在にその目を向け (Kropik, 2008)」る。そこでは救済史あるいは帝国史的な歴史構造を前提とする補完・相補的なテキストとの組み合わせにより英雄たちの物語には新たな文脈が用意され、歴史の断片から新たな「全体」ないしは「歴史」の遡行的な生成が試みられている。

本発表は、中世盛期に詩作された『ニーベルンゲンの歌』および『哀歌』、そし

て『ディートリヒの逃亡』および『ラヴェンナの戦い』という二つの複合叙事詩に加え、中世末期に成立した、様々な英雄伝承のアンソロジー的な書物である「英雄本」にパラテキストとして収録されている「英雄本散文」を対象とし、盛期中世および中世末期における英雄叙事詩の断片性の内実と、断片からの全体の構築という文学的営為の持つアクチュアリティを明らかにすることを旨とする。

## 2. 18世紀末の書籍・雑誌文化とフラグメント美学との関連性 – フリードリヒ・シュレーゲルのアテネウム期以前のテキストを手掛かりに

二藤 拓人

18世紀のフラグメントは、ロマン派を中心に展開される全体性／断片性の思想（Oschmann 2013 他）や「ノン・フィニト」（Schmoll 1959）の技法、「開かれた作品」（Eco 1962）に代表される制作美学・受容美学の議論に関わるだけでなく、表題に断片の語を含む雑録著述、往復書簡を通じて私的に読み交わされた草稿、文献学や歴史考証の素材となる古典古代の原典資料といった諸断片物を即物的に指示することばでもあった。本発表では、文化慣習に根差した一般的・標準的な使われ方も視野に含め、「断片」の理念と18世紀のメディア・文化事象との相関関係を明瞭にし、断片性の美学が発展してゆく物理的諸条件の記述を目指す。

そのために本発表は、一方でいわゆるアテネウム期（1798-1800）以前のF.シュレーゲルのテキスト（古代ギリシア研究やその遺稿・書簡）を分析する。そこで彼が用いるFragmentの語は上述の様々な文化実践との関係を色濃く反映しており、ロマン派による概念的利用の前段階といえる。他方で当時の公刊物を参照し、活字文学としての「断片」が、定期刊行を前提にした連載形式や寄稿作品特有の分量的制約のもと、書籍・雑誌メディアの特質に条件付けられて発展した表現形態であるとのテーゼを立てる。作品の全文を雑誌に掲載せず常に部分的公刊にとどまるというこの条件は、完成した〈全体〉に至ることのない〈未完の断片〉という理念が、制作美学として文学作品の中で展開していく一つの契機といえるはずだ。

## 3. 写真的断片の彼方 – クラカウアー「写真」論の理論的・文化史的読解

深澤 一輝

本発表はジークフリート・クラカウアー（1889-1966）のエッセイ「写真」（1927）を考察の対象とする。その誕生からおおよそ100年が経ち、社会に広く浸透してい

た写真という光学メディアに関するこのエッセイは、写真にまつわる最も早い時期のテキストの一つに数えられる。従来これは、このメディアの発達に伴う「記憶」の衰退を悲観していると図式的に理解されるか、あるいは先立って書かれた歴史哲学的エッセイ「大衆の装飾」(1927)の延長線上で読解されてきた(Mülder, 1985)。その一方で「写真」論は、このメディアが媒介するイメージに関する理論の定立としても理解されうる。1世紀近くの歴史を持った写真に対して、まさに「時間」の観点からこれを理論化しようとしたのだ(Hansen, 2012)。

これらの研究のみならず、とりわけ「断片(性)」に着目することでアメリカ亡命以前の著作を「近代性の典型例」だと論じたフリスビーの研究(Frisby, 1985)をも補助線としつつ、本発表では写真(イメージ)の断片性という性格に焦点を当て、作家がそれを越えて見出していた社会批判的な可能性を描き出す。その際、従来のテキスト内在な読解を越えて、とりわけ映画史的な背景を調査し同時代の文化的実践を新たに考慮に入れることで、エッセイ中の鍵概念である「アーカイブ」をより具体的に輪郭付け、本テキストを文化史の観点からも照射することを試みる。

#### 4. zer...zer... - トーマス・ベルンハルト『アムラス』のフラグメント性

金 志成

晩年の集大成的作品『消去』(1986)でも自己言及されるなど、著者「お気に入り」の作品として知られるベルンハルトの中編小説『アムラス』(1964)は、語り手による叙述／登場人物の遺稿／手紙／メモ書き／標題つきの断章／アフォリズム／引用などが入り混じる雑多なテキストのコラージュという形式面だけでなく、反＝物語としての「フラグメント」をめぐる詩論的な綱領をも含むという点でも、作家の断片性の詩学が最も顕在化した作品である。本作の断片性をめぐっては、エピグラフでのノヴァーリスの引用および「病」や「自然」などのモチーフを根拠に、最初期の研究(Zelinsky 1966)よりロマン派の影響・間テキスト性が指摘され続け、近年では断片ごとに異なる執筆時期の特定など、実証主義的な研究も進んでいる。本発表はそうした先行知見を踏まえつつも、テキストのよりミクロな文体やモチーフの次元に〈切断〉のイメージが前景化していることに着目し、本作の断片性をテキスト内在的な分析によって捉え直すことを目的とする。具体的には、前綴り zer を用いたベルンハルト独自の造語、三点リーダによる省略、幽閉／ナイフ／サドマゾ的表象などについて、作品のマクロ形式ならびに詩学との有

機能的な関係のなかで分析を行い、かつそれをつうじて、いわゆる Oeuvre=作品総体的に読まれる傾向にあるベルンハルトのビブリオグラフィーにおける本作の特異性を見いだすことを試みる。

## 5. 損傷した物語 – ゲアハルト・フリッチュ『ファッシング』における断片性の詩学

前田 佳一

20世紀オーストリアの文学には昔日のハプスブルク帝国という「全体」の崩壊という経験が共通の背景として存在しており、戦間期や第二次世界大戦後の保守的作家たちにはそれを文学的形象として回復せんとする傾向がみられた。他方で戦後の若手作家たちにはこのような虚構の全体性への志向に異を唱えるかのようにある種の「断片性」を志向する詩的実践がみられた。すなわち彼／彼女らはかりそめの全体性を表象するのではなく、むしろ20世紀オーストリア人の損傷した生を表象するための必然的な詩的原理として「断片性」を選び取ったのである。その最たる例の一つが「解体しつつ書く(zerschreiben)」というコンセプトをモットーとして掲げ、「損傷」そのものを表象する詩的原理としての「断片性」を発展させたインゲボルク・バツハマンである。本発表ではそのバツハマンとも交流が存在し、戦後のウィーン文壇の最も重要な人物の一人でもあるゲアハルト・フリッチュの1967年の『ファッシング』を主に取り上げる。これは戦後に生きる青年の記憶が彼の戦争時代の兵士としてのそれと常に交錯しつつ語られる長編であるが、物語世界の全貌が提示されることがなく、語りの時間軸がトラウマ的記憶によってたえず寸断されるという意味で「断片性」そのものを志向しており、戦後オーストリア文学の一つのオルタナティブな形式を提示していた作品とみなすことができる。

### シンポジウム VI (10:00~13:00) F 会場 (西 2-401 教室)

統語と意味のインターフェイスをめぐる – カートグラフィーの射程

#### Schnittstelle der Syntax und Semantik: Reichweite der Kartographie

司会：森 芳樹

Rizzi (1997) および Cinque (1999) 以降、カートグラフィー分析は変形生成文法において重要な役割を果たしてきた。従来は単一とされてきた機能範疇を精緻化していくことでより正確な統語記述を目指すと同時に言語の普遍的な構造を明らか

にしようとするカートグラフィー分析はまた、統語地勢図に文と談話の意味を書き込むことにもその特性を見てとれる。このアプローチは、ドイツ語に関する研究においても多くの成果を上げてきている。例えば、Frey (2004) では前域、Grewendorf (2005) ではスクランブリング、Bayer (2012) では心態詞といったテーマが取り上げられ、カートグラフィーによる分析を用いることでそれぞれの現象における統語論-意味論インターフェイスのあり方が提案されてきた。しかしながら、統語地勢図に文と談話の意味を書き込むアプローチには問題点もあることが指摘されており、例えば Ernst (2009) では、Cinque (1999) の提案する IP 領域のカートグラフィーでは副詞の語順を正しく予測することができないことが示されている。

本シンポジウムでは、ドイツ語における左方領域が関わる現象を取り上げ、カートグラフィー分析が約束している自らの特性の一つ、すなわち統語と意味の明瞭な対応関係を明示化するという理論的指針がどの程度維持できているかを検証したい。まず伊藤による第一発表では、事実性述語に埋め込まれた補文の構造が検討される。統語理論を用いた分析を提案することで、事実性述語に埋め込まれた補文の特異な性質が説明できることが示される。山崎による第二発表では、分裂文の統語構造が扱われる。分裂文における語順とその意味的性質を説明するにあたり、EmphasisP という機能範疇を用いた分析を提案し、人称代名詞がフォーカスされる分裂文に対してこの分析の敷衍性を問う。藤井による第三発表では、方向を規定する前置詞句の特殊な振る舞いが取り上げられる。カートグラフィーの枠組みのもと、CP と並行的な PP の構造を想定することで、方向を規定する前置詞句の語順及びアクセントに関する振る舞いが正確に予測されることが示される。

ここまでは統語と意味の明瞭な対応関係を維持できるような方向性が強調されるが、最後の岡野による発表では、そのような方向性の限界が指摘される。いわゆる半法助動詞である *drohen* を取り上げ、その意味的な性質を詳細に検討することで、証拠性を担う機能範疇を用いての統語的な分析に対する批判がなされる。*drohen* のための機能範疇を想定するだけではその意味的性質を正確に捉えることができないことを指摘し、形式意味論による *drohen* の分析を提案する。このように本シンポジウムではカートグラフィー分析の射程と限界の双方を示すことで、その妥当性を問うこととしたい。

## 1. ドイツ語の事実性補文の統語構造

伊藤 克将

補文の命題が真であることを保証する事実性述語 (z. B. *bereuen*, *überrascht sein*) に埋め込まれた補文 (事実性補文) は、話し手の命題態度を表す述語 (z. B. *denken*, *sagen*) に埋め込まれた補文とは異なった振る舞いを見せることが知られている。具体的には、事実性補文からは付加詞である *wh* 句の抜き出しが許されず、また項の話題化も事実性補文においては不可である。この現象を説明するにあたっては、統語理論を用いる分析と意味理論を用いる分析が存在する。統語理論を用いた分析としては、CP の上に DP を想定する立場 (Kastner 2015 など)、ForceP の欠落を想定する立場 (Basse 2008 など)、事実性演算子を想定する立場 (Haegeman 2014 など) がある一方、意味理論を用いた分析としては、前提の不成立 (presupposition failure) が原因であるとする立場 (Oshima 2007) や、付加詞である *wh* 句の意味表示に矛盾 (contradiction) が生じるためであるとする立場 (Abrusán 2011) がある。本発表では、ドイツ語の事実性補文を分析するにあたり各立場を検討し、統語理論を用いて事実性補文を想定する立場が最も妥当であると主張する。Haegeman (2014) の分析では事実性演算子の介在効果 (intervention effect) により付加詞である *wh* 句の抜き出しおよび項の話題化が禁止されるとされているが、すると項である *wh* 句も抜き出しが不可であるという誤った予測がされてしまう。そこで、根拠となる現象を示しつつ事実性演算子に特殊な素性を想定することで、正しい予測が得られることを示す。

## 2. ドイツ語の分裂文における人称代名詞と語順の統語構造

山崎 祐人

ドイツ語の分裂文には二通りの語順が存在する (z.B. *Es ist Hans, der kommt.* / *Hans ist es, der kommt.*)。先行研究ではフォーカスされる分裂要素が人称代名詞の場合、語順はひとつに限定されると言及されてきたが (vgl. Grewendorf & Poletto 1991: 199, Huber 2002: 78, z.B. *Er ist es, der kommt.* / *\*Es ist er, der kommt.*)、本発表では、分裂要素が人称代名詞の場合でも語順はやはり二通り存在することをコーパス調査によって経験的に示し、分裂要素が名詞句の場合と人称代名詞の場合の統語構造を論じる。まず、疑問文に対する応答という観点から分裂文の語順の有標性を位置付ける。分裂要素が名詞句の場合には、それが中域に生起する語順が無標、前域に生起する語順が有標である一方、分裂要素が人称代名詞の場合には、分裂要素

が前域に生起する語順が無標、中域に生起する語順が有標となる。統語構造に関しては分離 CP 仮説に則り、Trotzke (2017) が提唱する EmpP (Emphasis Phrase) を採用することで分裂要素が名詞句の場合の分裂文の語順の差異が正確に予測できることを示す。分裂要素が人称代名詞の場合には、さらに Rizzi (2015) の提唱する Criterial Freezing を想定することで有標語順の派生を正しく予測する。

### 3. PP と CP の並行性の観点から分析する動詞と方向を表す PP の一体性

藤井 俊吾

カートグラフィーの枠組みでは、CP と並行的に PP を分析する研究が存在する (Koopman 1997, Noonan 2017 及び Cinque and Rizzi 2010 の論集)。これらは PP の主要部の周囲に位置する要素を動詞ないし節の拡張領域 (=CP) に存在する機能範疇と並行的に捉えるという試みである。例えば Noonan (2017) は directional PP がその内部に locational PP を含み、また *rauf* や *rein* に於ける *r-* を、ダイクシスを表現し T を占める要素として分析することなどによって、*in der Kiste drin* や *um den Tisch drum rum* といった重複して現れる PP (shadow-P) の統語的派生を説明した。本発表では方向を表わす PP が (CP と同じく) V の右側に基底生成されることを示す。方向を表わす PP は対格目的語の右側に置かれるのが普通であるが、その場合対格目的語が最も強いアクセントを受け、PP がフォーカスを受けることもない (Maienborn 1994: 235)。基底語順が V>PP>T であり、動詞句の音形の実現の為に PP が V の左に移動すると考えれば、こうした語順とアクセントの振る舞いが説明可能になる。また PP 単独の命令文では平叙文とは異なり *Raus aus den Schulden!* の様に shadow-P>full PP という語順となる。Noonan (2017) は平叙文に於いて full PP が shadow-P を飛び越えて CP 指定部から左に移動すると分析しているが、命令文では強勢を担う要素が CP 指定部を埋めていると考えれば、この移動は起こらず観察される語順が得られる。更に CP とは異なり PP の基底生成位置が主文の T の左側であると考えられる理由については、PP の時制の解釈が主文の T に依存することを根拠とする。

### 4. 半法助動詞としての drohen の意味解釈

岡野 伸哉

*zu* 不定詞とともに用い、「～する恐れがある」のような懸念を含んだ予測を表す *drohen* は、主としてその統語的振る舞いに基づき、しばしば半法助動詞 (Halbmodale) の 1 つとして分類される (IDS-Grammatik 1997, Eisenberg 1999, Duden



2016)。一方で、この用法をどのような意味のクラスに分類すべきかということについては研究者の間でも意見が一致していない。認識的モダリティを表すとする見解 (Gunkel 2000, Kiss 2005)、主として時間・アスペクト的な意味を表すという主張 (Reis 2005, Heine & Miyashita 2008)、証拠性表現であるという立場 (Diewald & Smirnova 2010) など様々である。本発表では、*drohen* を純粹に時間的な表現としたときに予想される含意のパターンを検証し、また、他の明確に証拠的な表現の統語的振る舞いを観察することにより、*drohen* に時間的・証拠的意味の双方を与える分析が望ましいことを論じる。さらに、*drohen* の主たる意味的振る舞いを捉えるための形式的な分析を、Yalcin (2010) の確率的アプローチを用いて提案する。

*drohen* に証拠性と時間性という複数の機能範疇に関わる意味を認めるという本発表の提案は、統語構造と意味解釈の対応関係が、必ずしも自明でないことを示している。すなわち、*drohen* を時間・アスペクトに関わる機能範疇に位置づけるような分析（例えば、半法助動詞 *versprechen* に関して Jędrzejowski 2017）を踏まえたとするならば、*drohen* はカートグラフィー的により「低い」位置から、より「高い」、証拠性機能範疇に対応するような意味をも表していることとなり、カートグラフィー分析の理念にとって問題となりうる。

## シンポジウム VII (10:00~13:00) G 会場 (西 2-402 教室)

創作システムとしての翻訳

### Übersetzung als kreatives System

司会：新本 史斉

言うまでもないことだが、作家は書く以前に読んでいる。他者の言語を経験することで、自作の執筆は可能となるのである。そしてこの読みこみ／書きこみのサイクルは、単一言語内で完結するわけではない。ある種の書き手は複数の言語をも読みこむ。それも、この上なくゆっくりとじっくりと読みこみ、読みこんだものを他言語の岸辺に渡しさえする。すなわち、彼らは書く以前に翻訳しているのである。

構造的にも文化的にも異質な言語間を架橋する翻訳行為は、個別言語の表現可能性（とその限界）をめぐる感覚を研ぎすませるのみならず—原作テキストの固有性を慈しむ限りにおいて—不可避免的に翻訳先の言語を軋ませ、拡大することを強いる。親密な読書の一形態である翻訳には、他者への想像力に加え、自己の書

き換えという創造的契機がはらまれているのである。

本シンポジウムでは、ドイツ語を含む複数言語との親密な関わりがその創作において重要な役割を果たしている現代の書き手たちを取り上げ、彼らにおいて<翻訳>がいかなる形で創作システムとして機能しているかを、個々のテキストに即して明らかにする。身体的、電子的越境が常態化してゆく状況下、現代文学における言語的越境の創造性に光をあてる意義は、決して小さくはないと思われる。具体的にはまず、松永の発表では「ポエジーとしての翻訳」はどのように成立しうるか、翻訳者として活動しつつ、複数言語を使う詩の創作も行っているウリヤナ・ヴォルフの作品とその英語への翻訳を考察し、オリジナルテキストにおける言語実験を翻訳がどこまで再現しうるか—翻訳テキストが新しい創作作品としてオリジナルと対峙する可能性も含めて—検討する。次に山本の発表は、ルーマニア＝ドイツ人作家ヘルタ・ミュラーとオスカー・パスティオールの仕事に「パラサイト的翻訳」の可能性を読み解く。続いて、新本の発表では、現代ハンガリー語文学のドイツ語翻訳とドイツ語による創作を並行して行っているイルマ・ラクーザ、クリスティーナ・ヴィラーク、テレジア・モーラの作品を取り上げ、複数言語間の越境から具体的にいかなる創造性が生み出され得たのか、その独自性と多様性を論じる。さらに齋藤の発表では、日独のバイリンガル作家、多和田葉子の小説『雪の練習生』と『Etüden im Schnee』を比較分析することによって、自作翻訳のプロセスが何をもたらしているのかを明らかにし、その解釈を試みる。最後に関口の発表では、ムージル、ブロッホの翻訳者として出発した古井由吉の翻訳および創作のテキストを例に、長大な複文が日本語の中にいかに咀嚼され、独特な文体として変成されていったかを考察する。

## 1. 複数言語による創作と、遍在し増殖する翻訳

松永 美穂

ドイツにも日本にも、翻訳者を対象とする文学賞が数少ないながら存在する。今回はエアランゲンの文化財団が出している *Literaturpreis für Poesie als Übersetzung* に注目し、2015年にこの賞を受賞した Uljana Wolf の作品を中心に論じたい。ポーランド系のドイツ育ちで複数言語を解する Wolf は、英語やウクライナ語からドイツ語への翻訳の仕事のほか、複数言語を使った詩を書いている。言語や翻訳そのものをテーマとする詩も多く、アメリカ人翻訳者 Susan Bernofsky とのプロジェクトとして作られた *False Friends* (英語とドイツ語の同型異義語をテーマにしたテ

クスト集) や、Sophie Seita の翻訳による *Subsisters* などは、翻訳の可能性について考える上でも興味深い。特に *Subsisters* では、翻訳者が創作に参加する形でテキストを変化させていっており、ユニークな実験が行われている。

翻訳においては原語と翻訳先の目的言語の関係性が常に問題となるが、言語テキストに複数言語が共存する場合、それぞれの言語は翻訳の過程を経て目的言語内でどのように表現されるのか。たとえば日本語においてはルビやアルファベット併記といった処理の可能性が存在しているが、Uljana Wolf の作品とその英語への翻訳、そして Wolf 自身が行っている翻訳を通して、あらためて複数言語の持ち込みについて考えてみたい。

## 2. 私はパラサイトだった - H・ミュラーと O・パステイオールにおける寄生的翻訳と強迫神経症的読解

山本 浩司

ヘルタ・ミュラーの文学はしばしば自伝的と短絡的にとらえられてきた。しかし、研究者 N.O.エーケが指摘するように、与えられた現実には強迫神経症的な圧を加えたうえで独自の文学言語に翻訳したオートフィクションとしての性格をもっている。変圧は、根拠なき私的妄想や単なる自己目的化した実験精神によるのではなく、全体主義独裁国家で「社会のパラサイト」として迫害されてきたという個人的経験に由来するものだ。しかし「パラサイト」は美的次元に目を転じれば別の意味をもちうる。本発表では、M・セール、J・デリダ、J・ボードリヤールらの議論を踏まえ、特にオリジナルを媒介する送電線の内部に生じる故障として捉えるセールの理解によりながら、「パラサイト」が変圧器としての文学というミュラーのコンセプトの中で果たす生産的な機能を検討する。彼女がこの文学的方法を独自に編み出したのは間違いないが、それをより精密化していくうえで詩人オスカー・パステイオールと小説『息のブランコ』を共同製作した経験が少なからぬ意味をもっている。そこで、パステイオールのフレーズニコフ翻訳などに見られる「パラサイト翻訳」や「文体混交」という文学手法についても考察して、ミュラーの「パラサイト」的小説技法のもつ射程を厳密に測定することを目指したい。

## 3. 並列、並行、反復 - 言語の複数性と作家の固有性の交差から生まれる創作システム

新本 史斉

ドイツ語、フランス語、ロシア語、ハンガリー語、セルビア・クロアチア語を横

断しつつ創作、翻訳、批評活動を行ってきたイルマ・ラクーザ(1944-)は現代越境文学の範例的存在とみなされ、自伝的散文『もっと、海を(Mehr Meer)』(2009)ももっぱら作者自身の境界通過経験に焦点を当てる形で論じられてきた。しかし当作品は、他作品の翻訳経験から学んだ「並列」をはじめとする諸々のレトリックから織りあげられた高度な自己虚構テキストと読みうる作品である。翻訳経験を媒介とした独自の小説作法の展開は、ナーダシュ・ペーテルの長編小説『パラレル・ストーリーズ』(独訳、Parallelgeschichten)の独訳者としても知られる作家クリステイーナ・ヴィラーグ(1954-)の長編小説『こんな夜々の一夜は(Eine dieser Nächte)』の複雑に絡み合う語りの構造にも、さらに続く世代のハンガリー文学翻訳者テレジア・モーラ(1971-)の初期作品での、「差異」と「反復」を通じて否定的世界のただ中に肯定性を見出してゆく小説戦略にも見て取ることができる。

本発表では、個々の<翻訳者=作者>のプリズムから生じる創造性の観点から現代東欧文学と現代ドイツ語文学の接続可能性を論じることによって、言語の複数性と書き手の固有性の交差から生成するものを一ともすれば単一的議論に陥りがちな翻訳論的言説に回収することなく一累乗されてゆく差異へと開いていきたい。

#### 4. 多和田葉子の自作翻訳『雪のエチュード (Etüden im Schnee)』に関する一考察

齋藤 由美子

日独のバイリンガル作家、多和田葉子は、自作やドイツ語作家の作品を用いて、しばしば実験的に翻訳の可能性を追求している。これまでドイツ語から日本語への翻訳にほぼ限定されていたが、小説『雪の練習生』(2011)において、はじめて本格的に日本語からドイツ語への自作翻訳が行われ、2014年『雪のエチュード (Etüden im Schnee)』が出版された。『雪の練習生』及び『雪のエチュード』の先行研究においては、日本語版あるいはドイツ語版のみが分析の対象とされ、自作翻訳をテーマとして取り上げている研究はきわめて少ない。多和田自身はエッセイ『白熊の願いとわたしの翻訳覚え書き』(2014)や著書『言葉と歩く日記』(2013)のなかで、『雪の練習生』の翻訳について解説しており、特に後者は、翻訳プロセスに関する貴重な証言となっている。本発表の目的は、先行研究や多和田の言葉を踏まえた上で、翻訳が原作の解釈の多様性をいかに生み出しているかを明らかにすることにある。なお、『雪の練習生』の中国語訳や『雪のエチュード』の英訳と仏訳も参考にする。これらの言語の眼差しも導入することによって、日独の比

較だけでは気づくことのできないテキストの層を発見することができるだろう。

## 5. 古井由吉における翻訳と創作

関口 裕昭

現代日本を代表する小説家の古井由吉(1937～)は、まずドイツ文学者として出発し、ローベルト・ムージルの「愛の完成」と「静かなヴェロニカの誘惑」、ヘルマン・ブロッホの長編『誘惑者』の翻訳に取り組んだ。長大な複文からなる二人の作品を翻訳するために、古井は独自の文体を編み出さねばならず、同じ頃書き始められた初期の短編小説には、文体とモチーフの上で翻訳からの影響が濃厚である。本発表では、彼の翻訳をめぐる講演「翻訳と創作と」を参照しながら、翻訳を原文と対照させ、「愛の完成」については古井の3種類の訳を比較検討する。その際、講演で言及された「周期(Periode)」という概念に注目する。

古井は「翻訳と創作と」のなかで、「周期(Periode)」をキーワードに、翻訳と創作を結ぶ核心に触れている。これは惑星の公転周期、電波ではサイクル、言語学では左右の均整が保たれた「双対文」となり、ドイツ語では *herumgehen* 「周回する」ことを意味する。文章に即していうと、「上昇して頂点を回って下降する」周期となり、頂点において、読者を納得させる「得心点」というべきところがある。古井は翻訳に際し、一つの文だけではなく、幾つかの文のまとまり中に、周期的な構造を持った文体を生み出した。

「上昇して頂点を通って下降する」という運動は、ムージルやブロッホの長い文章にも見られる特質であり、古井は長大な文の翻訳と格闘する中で、この周期ともいうべき動きを体得していった。発表ではこの二人に加え、リルケ「ドゥイノの悲歌」の散文訳も参照し、古井の翻訳の本質に迫りたいと考えている。

### シンポジウム VIII (10:00～13:00) H 会場 (西 2-501 教室)

国民国家と「村物語」— 19世紀後半のドイツ語圏文学およびイタリア文学をめぐる地理的想像力

Nationalstaaten und „Dorfgeschichten“. Geographische Imaginationen der deutschsprachigen und italienischen Literatur im späten 19. Jahrhundert

司会：七字 眞明

しばしば19世紀はナショナリズムの時代であったといわれる。しかし、それは決して地域間の単なる分断や没交渉を意味していたわけではない。言語や文化を単

位とする「国民」や「民族」をめぐって大きな歴史＝物語が精力的に紡がれてゆくその背後では、産業化と資本主義を原動力とするグローバル化が急速に進展し、世界の各地で無数の「相互依存と相互干渉」の関係が切り結ばれていた（Osterhammel 2011; Stüssel 2011）。

農村から都市への人口移動と国境を越えた世界規模の交通というこの社会的・政治的変動に呼応して、文化の領域では〈大都市〉や〈植民地〉を舞台とするリアリズム小説が興隆するが、同時にこのとき、世界の片隅に位置する〈田舎〉を題材とする大量の物語群が生み出されたという事実を忘れてはならない（Berbig/Göttsche 2013）。辺境に暮らす農民の狭隘な生活世界を描き、ドイツ語圏では一般に「村物語 Dorfgeschichte」と呼ばれたこの文芸ジャンルは、19世紀中葉のヨーロッパにおける大流行を経て、のちのいわゆる「郷土文学 Heimatliteratur」の母胎となってゆく。広大な国土の一角に過ぎない片田舎を主題とする文学の需要が、まさしく国民国家の形成期に高まるという一見ねじれたこの構図を、「民衆」の中に「民族」の本質を求めるロマン主義のイデオロギーから説明することは容易だろう。しかし、産業化の時代の農村には「社会問題」という新たな局面が付随すること、さらに、帝国内部に複数のスラヴ系民族を抱えるオーストリアや連邦制の伝統を持つスイスでは、そもそも国民国家の理念／イデオロギーが持つ位置価値がドイツ帝国の場合とは大きく異なっていたことに鑑みれば、この時期の「村物語」への関心の急騰はそれ自体として注目すべき現象であり、とりわけ地域別の比較検討に値する争点として浮上する。

近年では、とくにイタリアの歴史家カルロ・ギンズブルグの「ミクロストーリー」をめぐる理論的枠組みにおいて、西欧の近代化を脱中心的に問い直す歴史学や人類学との学際的連携を視野に「村物語」の再評価が進んでいる（Neumann/Twellmann 2014）。本シンポジウムはこうした最新の研究動向も踏まえたうえで、19世紀後半の文学作品を例に、個々の〈村〉と〈国民国家〉を媒介する弁証法的な理路がどのように構想され、実践され、あるいは挫折していたのかを明らかにする試みである。ドイツ帝国成立の中心となったプロイセンに加え、帝国と少数民族によるナショナリズムとの摩擦に揺れる多民族国家ハプスブルク、連邦制の永世中立国として国際政治の中で独特な位置に立つ多言語国家スイス、さらにはドイツと同じく長らく小国分裂の状態にあり、一般に「リソルジメント Risorgimento」と呼ばれる民族運動を経て1860年代に国家統一を果たしたイタリアの事例をも視野に収めて、テキストをめぐる地理的な差異（それが成立した地

域とそこに描かれた土地)を焦点化する比較分析をおこなうことで、当時の文学が展開した地理的想像力の政治的射程を探ってゆく。

## 1. 「鉄道沿いの村」への帰郷 — ベルトルト・アウエルバッハの「村物語」と「美化」の閉域

西尾 宇広

19世紀に最も読まれた書き手の一人であるユダヤ系ドイツ語作家ベルトルト・アウエルバッハ(1812-82)は、1830年代にみずからの出自を前面に押し出したゲットー小説でデビューすると、40年代にはその主題を封印して「村物語」へと転向する(Twellmann 2014)。ユダヤ性の問題意識を抑圧しつつ、来たるべき統一ドイツに宗教的寛容を仮託するというその戦略的選択を、彼は詩論的著作『書物と民衆』(1846)のなかで、現実を「美化 Verklärung」する物語によって〈故郷と異郷〉を媒介し、「国民的な中心」を持たないドイツ人の集合的アイデンティティを弁証法的に構想する、という理論的展望として定式化した。ここには「村物語」というジャンルと国民国家への願望との密接な連関が確認できる。事実、農村の厳しい現実を告発する社会批判的傾向の強い初期作品『黒い森の村物語』(1843-54)に対し、ドイツ帝国の成立(1871)後、郷里の村に鉄道が通り、名実ともにそこがドイツの一部となったときに書かれた続篇『三十年後 新しい村物語』(1876)では、一転して国家統一の実現が言祝がれるなど宥和的な色彩が強い(山口2006)。本発表では、とりわけ従来の研究が軽視してきた後者の「村物語」に光をあて、その物語空間を貫く矛盾、すなわち、文化的他者の包摂を期待させる理想的な社会像を描き出すための「美化」の実践が、特定の人種を排斥する近代的な反セム主義の言説と相似形をなすことで、一つの閉域を帰結するさまを明らかにする。

## 2. ガリツィアと農民問題 — エーブナー＝エッセンバッハ『村と館の物語』

麻生 陽子

18世紀末にハプスブルクの属領とされたガリツィアは、失われたポーランドの文化的アイデンティティを担うと同時に、ポーランド人、ルテニア人、ドイツ人、ユダヤ人など多民族、多宗教が混在する空間として構想されてきた(Wolff 2010; Agnieszka 2003)。モラヴィア出身のマリー・フォン・エーブナー＝エッセンバッハ(1830-1916)の『村と館の物語』(1883)にも、農奴制や貧困という後進的なイ

メージをもつガリツィアを舞台にした短編がある。1846年、故国を再生すべく蜂起を企てる領主貴族らが、皇帝側に立つポーランド農民らに虐殺された史実を素材として創作された二編では、農民問題をはじめ、個人のアイデンティティをめぐる階級間の認識の相違やユダヤ人問題などが描出される。従来の研究では、対等な身分社会の建設を志すポーランドの革命家に感化されていくユダヤ人医師(『郡医官』)や過酷な賦役に反対する権利意識のたかい農夫の人物造形が解釈の中心にあった(『ヤーコプ・シェーラ』)(Ivasyka 2017)。作者の願望的思考と冷静な判断との間には亀裂も認められるが(Strigl 2016)、その矛盾を許容するのが、ガリツィアという想像力をかきたてる地方であった点は見逃せない。本発表では、彼女の「村物語」が農奴解放後の社会問題やナショナリズムがたどる末路を逆照射している点を示し、ガリツィアが農民やユダヤ人の地位向上とナショナリズムの抑止という作者自身の価値観を表現しうる場であったことを明らかにする。

### 3. スイス、ポーランド、イタリア — ゴットフリート・ケラー『馬子にも衣装』における共生形態の模索

磯崎 康太郎

ゴットフリート・ケラー(1819-90)の『ゼルトヴィーラの人々』第二巻の最初の物語『馬子にも衣装』(1874)は、彼の15年に及ぶ政治的実務を経て発表された作品である。これまでの研究では、衣服等の象徴的なモチーフ、小説の構成原理や語り口に注目が集まり、政治的観点からの考察は多くないが、物語の主人公である「ポーランド人」については、同時代的背景としてのポーランド情勢や、この作品で理想化されたポーランド像の意味が説かれてきた(Rudolph 2002; Kneip/Mack 2003)。イタリア像については作中での言及は少なく、一見些末な内容であるため、ほとんど注目されていない。私経済や資本主義の進展を厳しく批判したケラーは、人々の経済的関心の対極に政治的関心を位置づけ、政治的関心の非生産性をユーモラスに、そして一見批判的に描きながら、じつはこの点にスイスの伝統的な公共精神を接続させようとした。彼はポーランド像、イタリア像を用いて、新たに台頭する「民族的なもの」の苦境にも共感を示した。そしてこの共感は、第三者的な立場でのそれに終始するものではなく、自分たちスイス人の地歩を見直すことに向けられている。すなわち、「民族的なもの」との協調のなかにスイスの歩むべき新たな道が模索されたのではなかろうか。これら一連の過程は、後発の民族主義に対する作家晩年の政治観の変化を告げるものでもある。



#### 4. 地方の現実を「標準語」で自然に語る — ヴェルガ『マラヴォリア家の人々』の表現技法

霜田 洋祐

イタリアの「真実主義(ヴェリズモ)」を代表する作家ジョヴァンニ・ヴェルガ(1840-1922)は、短篇集『田舎の生活』(1880)や長篇小説『マラヴォリア家の人々』(1881)等において、画一化の進む都市生活ではなく、北部主導の国家統一後に北部との格差が広がった南部シチリアの田舎の暮らしに目を向け、それを「飾らないありのままの事実」として客観的に描こうとした。そのために小説を綴る言語にも話し言葉の自然さが求められたが、芸術的・政治的理由から、地方の民衆を描きながらも方言の直接的使用は控えられ、文学語であったイタリア語に民衆的な口語の特徴を付与するという方法が選択された。シチリアの諺や格言を数多く導入したり、文学的でない素朴な比喻を多用したりして土地の人々の世界観を写し取ろうとする『マラヴォリア家の人々』の言語について、従来の研究は標準語の下に隠されたシチリア方言要素を強調する傾向にあったが、本発表では、その言語がシチリアにとどまらない汎イタリア的な話し言葉の特徴を多く備えるとする近年の研究(Bruni 1999; 2016)にも着目し、地方のありのままの現実を地元の人々に視点を合わせつつ提示しようという本作が、どのような読者を対象に書かれたのかという問題に目を向けたい。それによって「真実主義」という特有の詩論と連動したヴェルガの言語表現が、より社会的告発の色彩の強い南部問題文学など後発の文学の範ともなっていることを示したい。